照子はそれには何んにも返事をしなかつたが、ふとみると、彼女はもう耐らなくなつたやうに蜂谷のところを細かく打慄はしながら、頻りに忍しさうに歔欷してゐるのであつた。

啓二郎はその様をあから眼もしずに打瞻つてゐたが、彼もみるみるうちに双眼へ一杯涙をためて、悲しさうに聲を曇らせながら、

「照子さん。貴女は何故そんなにお泣きになるんです。何も泣くことはないぢやありませんか。松谷さんは、松谷さんは、この手紙の中に一番いゝ自分を出して被居るんです。實に純な、美しいあの人のお心持ちがはつきり出てゐるんです。僕は照子さん、これを讀んでお泣きになる貴女の心持ちが何うしても分らんのです。」と、熱心になつていふ。

照子はそれでも激しい嗚咽を呑むばかりで、口もきけないやうであつた。

啓二郎は四邊に聲が洩れないやうに、氣を配ばりながら、

「ねえ、照子さん。松谷さんは、この手紙の中で、貴女に對する一番誠實な心持ちを僞らずに書いてゐられるのです。貴女の處女性といふものゝ尊さと價値を極力説明して、つまり貴

女の良心を呼び覺ます爲めに、何うかして貴女に輕擧をさせまいとこれほど苦心してゐられるんぢやありませんか。男が女を恵ふ場合にこれほど誠實な態度をもつてゐる人がこの世の中にどれだけあるでせうか、短かい言葉ではありますが、實に強い言葉です。僕はもうすつかり感激してしまひましたよ。『貴女の靈性の自覺を強ひる爲めに、僕はもう一度御反省が願ひ度いのです。神様は今恵みの深い瞳であなたの心をぢいつと凝視してゐられるのです。それをお感じにならないとすれば、貴女はもう永久に邪宗の子となつて、人生の汚泥の底に沈んでおしまひにならなければならないのです。……。』あゝ何んといふ綺麗なお心だらう。照子さん、貴女はもう一度この手紙をお讀みになつて御覽なさい。」と、ひどく興奮しながらいふ。

照子はそれでもまるで啞のやうに默して、唯ひた泣きに泣いてゐた。

啓二郎は燃えるやうな語調になつて、

「照子さん、もうあなたは決して家出をするなんて無謀なお考へを起しになつちやいけません。家出をして、貴女は、貴女は何處へいかうといふんです。そんな危險を冒さなくても、貴

女にはいくらだつて御自分を護る方法はあるんです。ですからどうか松谷さんの仰有るやうにもう一度貴女反省をなすつて下さい。僕は、僕は決して貴女のお身の爲めにならないことは申しませんから、お願ひです。どうか貴女としてもつともつと眞實な、安全な道をお歩きになつて下さい。」と、彼は漸次と聲涙共に下るやうな調子になりながら云つた。

照子はもう我慢が出來なくなつて、到頭疊のうへゝ泣き伏してしまつた。

四十三

それから四五日の間、照子はもう死ぬほど苦悶に苦悶をした。松谷からもその後は何の消息もなく、彼がどういふ心持ちでゐるかも少しも分らなかつたが、併しそれでも照子は、家出をしようといふ考へを捨てることが出來なかつた。母親とは同じ家にゐても殆んど顔を合はせる機會もなかつたので、その後光雄との結婚のことが何の程度まで運んでゐるか少しも探るに由もなかつたが、併し山田がしげしげ訪ねて來るところをみても、又傳話なぞで絶えず打合はせ

をしてゐるらしいのを見ても、話は日を追うて進捗してゐるらしかつた。照子はまるで歩一歩に奈落の方へ滑り落ちてゆく自分を、何うすることも出來ずにおろおろしながらぢいつと見詰めてゐるやうな心持ちで日を送つてゐたのであつた。

そのうちに三月の二十一日はいよいよやつて來た。その日は帝國ホテルで民子と加藤の結婚披露の盛宴が開かれるので、照子はどうあつても顔を出さなければならなかつた。併し彼女は穢れた民子が處女のやうな顔をして神聖な新婦の座に坐るのが見るに耐へないやうな氣がして何うしてもその席へ列るだけの勇氣がないのであつた。それに當然光雄もその宴席へやつて來るであらうし、さうした華やかな場所で光雄に何かと煩さくまつはられるのが、照子には耐らなく厭はしかつた。で、照子はその日の朝までは、病氣を云ひ立てに、出席を斷わるつもりでゐた。

その日の午後になると、又山田が自働車で訪ねて來た。そして一時間程も洋館の方の應接室で母親としめやかに話し合つてゐたが、それが濟むと、そのまゝ歸つていくかと思ひの他、彼

はふらりと照子の居間へやつて來て、障子の外から、

「照子さん、照子さん。此處に居るかな。」と、聲をかける。

照子は丁度その時、机のうへゝ兩肱をもたせかけて、いつものやうに、身の行末のことゞもを思ひ煩つてゐたので、その聲をきくと悸乎としていきなり居坐ひを直しながら、態と白らばつくれた聲で、

「誰方？」と、答へる。

と、山田はがらりと障子を開けて間内へ入つて來ながら、

「おゝ、照子さん、久濶ぢやつたなあ。」と、滿面に笑みを含んで、「いや、どうも今日も何んだか庶寒いのう。あんたはいつも丈夫さうで結構ぢや。はゝゝゝゝ。」と、取つてつけたやうな笑ひ聲をたてゝ、そのまゝ火鉢の傍へ來て坐る。彼はもう六十近い、いかにも學究風な、貧血性な顏をしてゐて、着てゐるものなぞも極めて質素であつた。

照子はもう何うにも出來なくなつて、態と丁寧にお辭儀をしながら、默つてゐると、山田は

袂から敷島の袋を取出して、煙草で黃色くなつた指先で一本ぬき出しながら、

「いや、照子さん。私はなあ、もう此間から一度あんたに逢ひ度いと思つて居つたのだが、うまい機會がなくて、今日までそのまゝになつて居つて殘念ぢやよ。」と、云つて、煙草に火をつけてぷかりと青い煙を吐き出しながら、「うむ、實は貴女に逢つて話さうと思つて居つたのは別の事ぢやないのだ。もう大方母樣から話しもあつたことゝ思ふが、例の柴山の方の話ぢやなあ。あれがいよいよ昨夜すつかり極つて、四月の二十八日に祝言をするといふことに決定したのぢや。まあどうかあんたもひとつ嬉んで貰ひ度いもんぢやが……」と、いふ。その言葉には無理に壓しつけるやうなぎごちないところがあつた。

照子はそれを聞いても、もう何んとも感じなかつた。此間からのいさくさで、どうせもう山田と母親二人で勝手に事を極めてゐるのは分つてゐたので、いつ祝言の式を擧げようが何うしようが、此方の構つたことではないといふやうな心持ちでゐた。で、彼女はもう何も云ふこともないので、唯默つて首を垂れてゐた。

山田はその様子をしげしげみながら、あとの言葉を考へてゐるやうであつたが、やがて、

「なあ、照子さん。そこで一應私からあんたの承諾を得て置かなけりやならん必要があるのぢやが、その事に就いて、あんたの方には何か希望のやうなものはないかな。もし何かかうして欲しいといふやうな條件があつたら、どうか腹藏なく云ふて貰ひ度いのだが……」と、いふ。

照子は齒をくひしばつてぢいつと息を呑んでゐたが、もう何うでもなれといふやうな投げ遣りな調子で、

「小父様。もう私、何も申上げることも御座いませんから、どうかよろしいやうになすつて頂き度う御座います。」と、呟やくやうな低い聲でいふ。

山田はその言葉の意味を何うとつたのか、急にほツつとしたやうな顏で笑ひ出して、

「いや、〳〵照子さん。あんたがさういふ心持ちになつて呉れたのは何よりぢや。實は母様も今度のことでは非常に心配をされて、全くのところ夜の眠も眠れんと云ふて居られるので、私も實はお氣の毒ぢやと思ふて、まあ私で出來るだけのことはしたつもりなのぢやが、幸ひにしてか

ういふい〻結果をみて、私もこんな嬉れしいことはないのぢや。もう私はあんたの過去のことに就いては、何も云はん。あんたもあのお父さんの子ぢやから、たとへ一度の過誤はあつたとしても、もう今では充分悔悟もして居るだらうし、又反省もして居るだらうと私は信じて居るのぢや。だから今後はどうか人妻として人倫の道を正しく踏んで、もう二度と再び過誤を繰り返さんやうにして貰ひ度いのぢや。さうすれば母様も安心されるぢやらうし、又お父さんに對して、この私の顏も立つことになるのぢや。なあ、照子さん。分つたか。」と、まるで伯父のやうな口調になつてゆく。

照子はもう何んにも云はずに、ぢいつと唇を嚙みしめながら、やつと口惜し涙を押へてゐた。

山田はそれからもいろいろと結婚に就いての詳しい話をして聞かせて、先方でも非常に嬉んでゐることや、それから又結婚してから一年の後には夫婦相携へて歐米へ渡航するといふ條件のついてゐることまでもすつかり語つた。併し照子にはその言葉がひとつも胸へ入つて來ない

のであつた。彼女は唯顔を伏せて、自分の今後の身の振方のことばかり考へてゐた。

山田は一時間ばかり話すと、何處か意氣揚々とした樣子で歸つていつた。照子も打棄つて置く譯にもいかないので、廊下のところまで送つて出ていつたが、山田はそれを制して、

「いや、照子さん。私はもうこゝで失禮するよ。これからもう一度母樣のところへいつて、あんたが快く承諾してくれたことをすつかりお話して、母樣にも安心して頂かんけりやならんからなあ。はゝゝゝゝ。まあ、あんたもこの時候の惡い昨今ぢやから、よく氣をつけてな、體だけは害はんやうにして下さい。それぢや又いづれそのうちにゆつくり話しに來ますから……」さう云つて、彼は咳をしいしい又奥の間の方へ歸つていつた。

照子はたつた一人になると、もう自分の體が自分のではないやうな心持ちがして來た。いよいよ光雄との結婚のことが取極められたのかと思ふと、嘘のやうな氣がして、焦々した心持ちはとても口では云ひ盡せなかつた。彼女はそのまゝ又もう一度机の前へいつてどかりと坐ると冷たい机のうへゝ兩手を倚せかけて、うつらうつらと深い思ひに沈んでしまつた。

照子は今日こそいよいよ決心を極めなけりやならないと思つた。いつまで愚圖々々してゐても、到底血路を開くことは出來ないに極つてゐるので、たとへこの福井の家にどのやうな恐ろしい波瀾が起つても、もう彼女は躊躇することなしに、初志を斷行しようと思つた。松谷はたとへどんな心持ちでゐようとも、もう彼女はそれすらも考へてゐられないほど熱狂してしまつてゐるのであつた。

家出をするとなると、今日こそ屈强な日である。今迄は出席しまいと思ひきめてゐた民子の結婚式へ出て、その間に機をみて、姿を消してしまへば、もうそれで萬事は事もなく解決してしまふのである。かうして毎日毎日隙を窺つてゐながら、家にゐては監視がきびしくて、とてもうまい工合に脱け出すなぞといふことは出來ないに極つてゐるので、今夜のやうな日こそ願つてもない好機會である。幸ひ母も今の山田の話で安心してゐるであらうし、又たとへ監視の人をつけてよこすにしても、啓二郎がその任を負はせられるに極つてゐるので、さうなればもう此方のものである。あの正直な啓二郎一人ぐらゐ誑かすのは譯もない仕事だと思ふと、照子

は居耐れないほど氣が勇んで來た。

照子はもう一度とつくりと方策を考へたあとで、やがてお春を呼んで、何喰はぬ顔で、

「ねえ、春。あの、今夜は民子さんの御婚禮なんだから、母様にさう申上げて、支度をしておくれな。」と、いふ。

お春も吃驚して、

「まあ彼方は今夜が御祝言なんで御座いますか。それはそれはお目出度で御座いますのねえ。」と、云つて、「あの、それなら昨日から伺つて置けばよろしう御座いましたのに、お嬢様が何んにも仰有いませんもんで御座いますから……これからお支度を遊ばすんぢや大變で御座いますわ。」と、さも困つたやうにいふ。

照子は事もなげに、

「いゝえ、何もそんなに大事にしなくつたつていゝわ。唯模様さへ揃へて置いて呉れゝばいゝんだもの。……」

「でもお嬢様、御祝言のお席なら、お髪もお上げにならなけりやなりませんで御座いませう？」

「いゝえ。髪は私自分で直すわ。ねえ、春、それよりもすぐに母様のところへいつて、さう申上げて來てお呉れな。それでないと又お許しが出ないと困るから。」と、云つて、「あの、もう山田様の小父様はお歸りになつて？」

お春は合點いて、

「はい、あの、つひ今しがたお歸り遊ばしました。」と、云つて、「あの、それでは私、とにかく奥様にさう申上げてお指圖を受けて參りますわ。」と、云つて、お春の方がそはそはしながら立たうとするのを、照子はふつと何か思ひついたやうに引止めて、

「あゝ春、あの、序にこれを持つていつてお呉れ。又お疑ひでも受けると可けないから。」と、云つて、机の抽出しの中から、結婚披露の招待狀を取出して、それをお春に持たせてやつた。

それからものゝ二十分も經つと、お春は息せき歸つて來て、坐りも敢へず、

「あの、お嬢様、唯今奥様にさう申上げましたら、何故早くさうならさうと此方へさう云つて來ないつて、大層私がお叱りを受けてしまひましたわ。それであの、被往つてもいゝから、あの、私にお伴をしろつて仰有いますの。ほんとに私も急なことで、困つてしまひして御座いますわ。」と、それでもひどく嬉れしさうにいふ。

照子もほつとして、

「まあ、お前が一緒に來て呉れるの。それなら猶ほいゝわ。」と、云つて、「あの、それぢや二人して大急ぎでお支度にかゝらうぢやないの。それにしてもまだ二時だもの、まだゆつくりだわ。お前の髪は私が直してあげるから、その代り私のはお前直してお呉れよ。」と、いそいそしながらいふ。

お春はすぐさま臺所へいつて、風呂の支度をさせようとしたが、そんなことをしてゐてはとても間に合ひさうもないので、照子はもう氣をせいて、唯湯だけ取らせて、顔を洗つた。そしてそのまゝ化粧室へ入つて、お春を相手にせつせと化粧にかゝつた。自分のがすむと照子は今

度はお春の髪を直してやつたり、白粉の世話をしてやつたり、いつになく親切に彼女の支度に手傳つてやつた、お春はさうした華やかな場所へ伴をするのが此上もなく嬉れしいやうにもう氣が浮々してゐた。

それから二時間ばかりかゝつてやつと二人は支度が出來上ると、照子はもう一度大姿見の前へいつて立つた。お春は後から覗き込むやうにしながら、

「まあ、お嬢様、このお模様はほんとによくお似合ひ遊ばしますのねえ。まるでこれぢやお嬢様の方が花嫁様のやうで御座いますわ。ほんとにお美しくおなり遊ばして、私共はお羨ましう御座いますわ。あの、こんなにお美しくおなり遊ばしたんで御座いますから、ねえ、お嬢様一寸奥様のところへお出で遊ばしまして、御覧に入れて被來いましよ。」と、噪ぎながらいふ。

照子はそれを遮つて、

「春、お前も知つてゐる通り、私、今母様の御機嫌を損じてゐるんだから、そんなことをしちや却つて母様に失禮に當るわ。今日はこのまゝ默つていつた方がいゝわ。」と、いふ。

お春は笑つて、

「まあ、左様で御座いますか。それではあの私一寸お斷りだけ申上げて參りますわ。あの、さうして序にお自働車が參りましたかどうか見てまゐりたいですから。」さう云つて彼女は足音も輕く廊下の方へ出ていつた。

間もなくお春は自働車が來たといつて歸つて來たので、照子は大急ぎで松谷の手紙を内懷へ隱して、そのまゝそわそわ居間を出ていつた。

内玄關へ出ると、そこには啓二郎も出てゐて、彼は何んにも云はずに唯ぢいッと照子の姿にみいつてゐた。照子も何か云はふかと思つたが、場合が惡いので、唯眼で會釋をして、ついと履物をはいてしまつた。

自働車に乘つて、玄關先を離れようとする時、照子はふつと何の氣なしに洋館の方をみたがその時、母親がそこの窓の窓帷の陰からそつと此方を差覗いてゐる姿が眼に入つた。彼女はひやりッとして、口の中で思はず、

「母様！」と、云つたが、自働車はもう容赦もなく馬車廻はしへかゝつてしまつたので、母親の姿はその次の瞬間にはもう見えなくなつてしまつてゐた。

照子はもう一度後窓から玄關の方へ眼をやつたが、これが生みの家の見納めかと思ふと、さすがに彼女も張りつめてゐた氣がゆるんで、云ひ甲斐もない悲しさが胸一杯に込みあげて來るのであつた。今日このまゝこの家を出てしまへば、何日になつて又歸れることやら分らないし家を捨てゝ他人ばかりの中へさすらひ流れてゆく行末の事もそれとなく思ひ浮べられて來る。それを思ふと、うら若い照子はもう我慢が出來なくなつて、熱い涙が喉もとまで突上げてくるのを何うすることも出來ないのであつた。

お春はその涙をみとがめて、

「あら、お孃様、どう遊ばしました？」と、眼を丸くして訊いたが、照子はやつと嗚咽を嚙み耐へて、

「いゝえ、何んでもないの。私、どうして母様の御機嫌なんか損じたのかと思つて、それが悲

しかつたもんだから。……」と、だけ云つて、そのまゝ默り込んでしまつた。

自働車は通ひ馴れた道を右左へ曲りながら漸次と新宿の大通りの方へ出てゆく。照子は町角にあるポストや、電信柱のやうなものにまで何となく悲しみが殘るやうな氣がして薄暮の町の樣が、どうしても眞面に見てゐられないのであつた。

自働車は丁度午後の六時二十分程前に、日比谷公園の大道へ來て、間もなくホテルの大玄關へ横着けになつた。もうその時分には四邊はとつぷりと暮れて、エントランスホールに點つてゐる燈火が、不思議な輝きをみせてゐるのであつた。

ホテルのボーイは照子のコートを預かると、そのまゝ二人を奥廊下の方へ案内していつた。加藤家の披露の宴席はずつと奥まつたホールに設けられてゐて、そこの大廊下のところには受付けの卓が据ゑてあつた。照子はそこへいつて自分の名を云つて、お春を化粧直しの間へでも入れて待たせて置いて呉れと頼んだが、受付けの人は心得て、

「あの、それでは控室が御座いますから、お伴のお方はそちらへ御案内させて置きませう。」と

云ふ。

照子はやつと安心して、お春を殘して接客室へ入つていつた。まだ時間が定刻よりも少し早いので、そこには僅か三四人の客しか來てゐないやうであつたが、ふつと入口のところをみると、金屏風を引廻はした扉の際のところにはもう民子をはじめ、加藤醫學士も、それから民子の父母もその他親戚らしい人々が五六人禮裝の威儀を正してきちんと並んでゐた。

照子はそれをみると、心持ち顏を染めて、先づ民子の兩親から順々に挨拶をしていつて、花のやうに着飾つた民子の前へ來ると、態と丁寧に、

「お目出度う御座います。」と、いつた。

と、民子は眞白に化粧した顏ににつこりして、

「有難う御座います。まあ、ほんとによく被來つて下さいましたことねえ。」と、いふ。その臆面のない態度が先づ照子には不愉快でならなかつた。

照子はそのまゝ室の隅にある安樂椅子の方へ歩いていつたが、その時、後から追ひすがるや

うに誰れかゞ立つて來て、

「照子さん、照子さん。」と、小聲で呼ぶ。

振顧つてみると、それは光雄であつた。

彼はその晩は立派なタキシードなぞを着込んで、まるで若手の外交官か何かのやうな風をしてゐたが、照子にも彼の姿がひどく美しくみえたのであつた。

照子がまだ何にも云はない先に、光雄はやさしい調子で、

「照子さん、僕はもう先刻から待つてゐたんですよ。まあ、そこの安樂椅子へいつて腰をかけませう。」と、云つて、彼女を誘ふやうにしながら、自分が先に室の隅の方へ歩いていつた。

照子は我にもなく眞紅になつて、そのまゝ彼の後からついていつた。

四十四

照子はもうその晩は、光雄に何んな目に逢はされるか分らないと、前以つて覺悟をきめて

ゐたので、もうその次の瞬間にはいくらか氣も落着いて來た。で、彼女は云はれるまゝに、ホールの隅にある安樂椅子へいつて、光雄と並んで腰をかけたが、光雄はどうしたのか、その晩はひどくそはそはしてゐて、ポケツトから煙草を取出して吸ふ手も可笑しいほど慄へてゐた。

光雄は金口の煙草に火をつけてそれを一服吸ふと、そのまゝ照子の方を向いて、

「ねえ、照子さん、今夜は僕、實に嬉れしくて耐らないんですよ。實はつい今しがた邸を出て來る時に、山田さんからいゝ御返事があつたんで、僕、全くの處、有頂天になつてしまつたんですよ。」と、早口に云つて、「ねえ、照子さん、僕はほんとに何よりも先に貴女にお詫びを云はなけりやなりません。今日迄僕は實際のところ貴女のことを思ふ餘りに、いろんな失禮なこともしましたし、又度々貴女に御迷惑をかけて仲とも申譯がありません。どうか照子さん。それだけは許して下さい。ね、照子さん。」と、彼は頰を紅くしながら、鼻へかゝる聲で、出來るだけ優しくいふ。その態度はまるで哀願してゐるやうであつた。

照子は何とも答へずに、唯顏を伏せてゐた。心の中では今日の午後、山田に逢つた時のこと

をまざまざと描出してみて、きつと山田から自分が結婚を承諾した旨を柴山家へ傳へたので、それできつと光雄はこんなことをいふのであらうと思つてゐた。併し照子はそんなことを云はれても、もう反感も起らなければ、怒りも覺えなかつた。どうせ今夜はどんな目に逢はされても、もう自分は明日からはまるで違つた境遇へ身を落としてしまふのであるから、少しも構つたことではない。寧ろ今夜は光雄の前では何事も氣振りには現はさずに、もう何も彼も彼の云ひなりになるやうに見せかけて置いて、少しでも光雄に安心させ、その油斷を見澄して、巧みにこの宴席を脱け出してしまはふと考へてゐるのであつた。

光雄は照子がそんな考へでゐようとは夢にも知らないので、もう全心を彼女のうへに傾け盡してゐるやうに、

「ねえ、照子さん。ほんとに僕、この通りお願ひするんですから、どうか今迄のことはきれいに水に流してしまつて下さいな。それでないと、僕、今夜だつて打融けてお話しをすることも出來ないし、第一僕は自分の態度をきめることが出來ないんですもの。ね、照子さん、ほんと

に許して呉れますか。ね、何んとか返事をして下さい。」と、照子の顔を下から覗き込むやうにしながらいふ。

照子は少し顔を上げて、

「光雄様、あの、もう何うかそんなことを仰有るのはおよし遊ばして下さいましな。私、別に何とも思つては居りませんのですから。」と、かすかな聲でいふ。

光雄は、そつと片手を照子の手の上に置いて。もう夢中になつてゐるやうに、

「いや、そのお言葉を聞いて、僕はほんとに安心しましたよ。實際僕等二人の間には今迄にいやな記憶ばかり殘されてゐるんです。それは全くのところ今夜限り忘れてしまひませうねえ。さうして照子さん。僕と貴女の間には、今夜からまるで新らしい關係をこしらへようぢやありませんか。僕は今迄して來たことに對しては、充分悔恨も感じてゐます。又反省もしました。改悛もしました。さうして僕はほんたうのところ今日から僕といふものゝ性格から、行爲に至るまで總てを洗ひ上げて貴女の希望に添ふやうな清い人間にならうと決心をしてゐるのです。

ですからどうか照子さん。貴女もそのつもりで、今迄の僕といふものはすつかり忘れてしまつて、まるで新らしい人間になつた僕をみて貰ひ度いのです。」と、熱心になつていふ。

照子も合點いて、

「あの、私、よく分りましたわ。貴方がさういふお心持ちになつて下すつたのは何よりだと思ひますわ。」と、合槌を打つやうにいふ。

光雄はさうした思ひ懸けない言葉が一々彼の胸を唆るやうに、

「いや、さう云つて下さると僕も實に嬉しいですよ。全く二人が今かういふやうな關係になるといふことはまるで奇蹟のやうぢやありませんか。僕がかういふ幸福を得たといふのも全く貴女のお力なんです。貴女が僕といふものゝ心持を理解して呉れて、今日のやうな決心をきめて下すつたばつかりに僕は全く救はれたのですよ。ねえ、照子さん、僕は決して嘘僞りは申しません。全く貴女の愛によつて、僕は救はれたのですよ。」と、いふ。

照子は默つてその言葉を聞いてはゐたが、腹の中では可笑しくて耐らないのであつた。可笑

しいばかりではなく何かしら嘲笑の念が押へ切れない程込み上げてくるのであつた。

光雄はさうなると、益々興奮して來て、

「ねえ、照子さん。そこで、これはまだ山田さんともお打合はせをしないんですが、四月の二十八日の披露ですな、あれは家の父なんか、やつぱりこのホテルの方がいゝといふんですが、僕はこゝよりも東京會館の方にし度いと思ふんです。客の數だつて、どうせ三百人以上にはなると思ひますから、どうかあなたも、そのつもりでゐて呉れて、山田さんから何か話があつたら、どうかそれを主張して呉れませんか。」と、云つて、何か思ひ出したやうに、「あ、それから何よりも先に御相談して置き度いのは、その、結婚式のことですな。貴女は聖心女學院の出身だし、それに平常からクリスチヤンだから、どうしてもやつぱり式は基督教の教會でお擧げになり度いでせうなあ。」と、顏を寄せていふ。

照子は態と恥かしさうに、

「さあ、私、まだそこまでは考へてみませんけれど、あの、それはいづれでも貴方のおよろ

しいやうになすつて頂き度う御座いますわ。」と、いふ。彼女はそれを云ひながら、こんなことまで自分のこの淨い唇から云はなければならないのかと思ふと、何か穢れたものでも口にしたやうでしみじみ情なかつた。

光雄はにつこりして、

「いや、併しそれはさう容易く極めてしまへる問題ぢやありませんよ。お互に信仰のことは自由でなけりやなりませんからなあ。はゝゝゝゝ。」と、云つて、又新らしい煙草に火をつけながら、「僕の父はあゝいふ人間ですから何んでも大神宮あたりでやらせ度いと思つてゐるらしいんですが、併しそれぢや月並ですからなあ。ひとつ此れは大いに考へんけりやならんと思ひますよ。」

照子はもうそんなことを聞くのさへ厭なやうな氣がするので、心の中ではあの松谷のことばかり考へながら、いつかしら浮の空な心持になつてしまつてゐた。

光雄は氣取つた態度で足を組み合はせながら、

「いや、併しいづれにせよ、僕は貴女と結婚することを考へると、この胸がもう張裂けるやうな歡びを感じますよ。僕も隨分長い間この問題では苦しみましたからなあ。」と、云つて、ぷかりぷかりと香りの高い煙草の烟を吐き出しながら、「それに結婚するとすぐに僕等は平常からこんなに憧憬してゐる歐羅巴へ一緒に遊びにいけるんですからなあ。それを考へると、僕は全く若々しい幸福に醉はずにはゐられなくなつて來るんです。やつぱり僕も今迄これほど苦しんだお庇護で、神様は決して僕を捨ては下さらなかつたんですなあ。」

光雄がさう云つてゐるところへ誰かゞ後から足音を忍ぶやうに近寄つて來て、

「光雄様、照子様、大層お睦ましいんで御座いますわねえ。ほゝゝゝゝ。」と、聲高に笑ふ。

光雄も照子もあんまり不意だつたので、悸乎としてそつちを振顧つたが、とみると、そこにはいつ來たのか花嫁の民子が金絲を鏤ばめた帶に電燈の光をきらきら集めながら立つて、象牙骨の扇で口を掩ひながら艶やかに笑つてゐる。

光雄はそれをみると、一寸眞顔になつて、

「お、民子さんですか。だしぬけに吃驚するぢやありませんか。もう貴女、彼方は濟んだんですか。」と、いふ。

と、民子はそのまゝすらすらと前へ廻つて來て、

「え、もうお客様は大概お集まりになりましたの。私あんなところへ、まるでお人形様みたいな恰好をして立つてゐるのはつくづく馬鹿臭くなつてしまひましたわ。ほんとにこんな形式的なことは厭ですのねえ。」と、蓮葉にいふ。

とみると、向ふのホールには成る程もう百五六十人の來客がいつの間にか來揃つて彼方此方に打群れては賑やかに談笑してゐた。

光雄はそれをみると、態と驚いたやうに、

「お、もう大分お集まりですなあ。さすがにお醫者様のお客が多いだけに、西洋時間ですなあはゝゝゝゝ。」と、とつてつけたやうに氣取つて笑ふ。

民子はそのまゝ照子の隣りへいつて腰を下ろしながら、

「ねえ、照子様、私こゝへ隱れさして下さいましな。もう先刻から立ちづめなんで、腰が痛くなつてしまひましたわ。」と、云つて、大きな島田を照子の方へ傾けながら、「ねえ、貴女、あの、私、つひ今しがた伺つたんですけれど、貴女もいよいよお極りになつたんですつてねえ。ほんとに私お羨ましう御座んすわ。貴女はほんとに幸福で被居るわねえ。」と、何處かに妙な感情を響かせながらいふ。

照子は默つて、唯俯向いてゐた。

民子はその顏を覗き込むやうにして、

「ねえ、照子様、ほんとにもう幾らお隱し遊ばしたつて駄目ですわ。御當人の光雄様がうつかりお饒舌を遊ばしてしまつたんで御座いますもの。ほんとに正直に白狀遊ばせよ。」と、云つて扇の先で一寸照子の手先を叩く眞似をしながら、「でも貴女、何を云つたつて貴女は幸福ですわ男の方にこれほど迄思はれて、しかもその方と御結婚はなさるし、それに歐羅巴へまで被往るんだつて云ふぢや御座いませんか。私、しみじみお羨ましいと思ひますわ。私貴女のことを

思ふと、もう自分ていふものが情なくなつて來て、今夜は何んですか、もう泣き度くつて、泣き度くつて、仕様がないんですの。私いつそヒステリーでも起して、卒倒でもしてやらうかと思つてゐるんですわ。」と、いふ。

光雄はさあらぬ顔で、

「民子さん、笑談ぢやありませんよ。そんな芝居はしつこなしにしませうねえ。はゝゝゝ。それにこんな席で照子さんを冷評すのは可哀さうですよ。だからまあ、今夜は結婚の問題はこのまゝ祕密にして置いて貰ひ度いですなあ。あなただつて今夜は大事な場席ぢやありませんか。」

民子はその顔を恨みがましい眼でみて、

「あら、あんなことを仰有つて、光雄様も隨分ですことねえ。あなたにも私、うんと奢つて頂かなけりやなりませんわ。今夜まで照子さんのことを默つて被居つて、ほんとに憎らしい方ですわ。まあ、覺えて被居いましよねえ。いづれ後で敵をとつてあげますから。」と、睨むやうな

眼つきになつて、又照子の方をみながら、「ねえ、照子様。それであなた、あの、例の畫家の松谷さんの方の問題はどうなりましたの。もうあの方の方は御用濟みになつてしまつた譯なんですの？」と、いかにも刺のある皮肉な調子で訊く。

照子は場合が場合なので、ひどくどきまぎして、

「あら、松谷さんの問題つて何んで御座いますの。」と、顔をあげずに訊き返す。

民子は扇で彼女の膝を小突きながら、

「照子様、いくら貴女光雄様とお約束が極つたからつて、そんなにお白ばつくれにならなくたつてよう御座いますわよ。ほゝゝゝゝ。どうせもう何んでせうねえ。かうなりやあの方だつて何も御用はないんですから、アデュー・フォーレバーでせうねえ。ほんとによく出來てゐますわねえ。お互に學校にゐる時分には、マダム様に神の子と讃めあげられた秀才でしたけれど、この様子を御覽になつたら、神様も横を向いて苦い顔をなさるかも知れませんわ。ほゝゝゝゝ。あゝ、私、頭痛がして來ましたわ。」と、云つて、白い指で蜂谷のところを押へる。

光雄は眉を顰めながら、

「民子さん、もういゝぢやありませんか。僕の前で今松谷の話なんかされると、僕だつて不愉快になりますから、どうかもうその問題には觸れないで下さい。それよりも貴女、彼方へ行つてゐなけりや、お客様や花聟さんに失禮に當りやしませんか。」と、少し角だつていふ。

と、民子はヒステリツクに口を曲げて、

「ほゝゝゝゝ。男の方つてほんとに勝手なもんですのねえ。ねえ、光雄様、今夜私、何をしようと、私の自由ですから、どうか放棄つてお置きになつて下さいましな。あゝ、私、何處かへいつて思ふ様泣き度い。泣けるだけ泣いたら、いくらか氣が晴れるかも知れないわ。」と、獨語のやうにいふ。

照子はもうそんな會話がとても聞いてゐられなかつた。

と、そこへ民子の母親である博士夫人がうろうろしながらやつて來て、やつと民子を搜し出したやうに、

「おや、民子、お前こんな處にゐたのかい。ほんとに仕様がないぢやありませんか。もう向ふでは餘興が初まるのに、皆様の被居るところにゐなけりや加藤さんが一人で困つて被居るぢやありませんか。」と、いふ。

民子は不貞腐れた調子で、

「だつて母様、私、頭が痛くて仕様がないんですもの。少しの間休ませて頂かなけりや倒れてしまひますわ」と、いふ。

博士夫人は困つたやうな顏で、

「お前、今そんなことを云ひ出しちや困るぢやないか。それならそれで、彼方へいつてお藥でも服んで、今夜だけはしつかりしてゐて呉れなけりやどうにもなりやしませんよ。まあ、とにかくお父様の方へお出でなさい。お父様も心配して被居るぢやないか。」と、いふ。

民子は澁々立上つて、何かぶつぶつ口小言のやうなことを云ひながら向ふへ出ていかうとしたが、ふつと又振顧つて、

「ねえ、照子様、あの彼方に、秋子様や、葉子様や、多惠子様が被來つてゐますから、貴女も彼方へ被來つて下さいましな。皆さん久振りですから、貴女を捜して被居るんですわ。光雄様とは後で御悠りお話しをなさりやよろしいぢや御座いませんか。」と、突懸るやうにいふ。

照子もさう云はれると、光雄の傍にゐるよりも、同窓の連中と話しでもしてゐた方がいくらいゝか分らないので、そつと立上つて、光雄の方へはそれとない會釋を投げながら、それなり民子のあとからついていつた。

光雄は掌中の珠を攫はれたやうな顔をしてゐたが、博士夫人がゐるので、機が惡くて、その儘ゝ止めることも出來ずに、默つて苦笑ひをしてゐた。

四十五

照子は丁度その時、奥の方の棧敷のやうになつた通路の下のところに同窓の連中がひと塊りになつて何やら面白さうに話し合つてゐるのを發見したので、徐かにそつちへ歩み寄つていつた。

と、中の一人はそれを認めて、

「あら、葉子様、照子様が被來つてよ。まあほんとにお珍らしい。」と、驚いたやうにいふ。

その聲で皆は此方を振顧つたが、いづれも久振りに逢ふので、さも懐かしさうな顔色をみせながら、

「あら、照子様。」

「まあ、隨分久濶ねえ。」

などゝ口々に云ひながら、照子の周圍へ集まつて來る。大方は結婚してしまつた人達なので初々しい丸髷も照子には眼馴れなくて可笑しかつた。

照子も丁寧に辭儀を返して、その後のことなぞもぼつぼつ語り合つたが、併しかうして逢つてみると、もう各自の境遇が變つてゐるので、照子には妙にそぐはないやうな心持ちがして少しは寂しくも感じられるのであつた。

そこへ、一度父親のところへ呼ばれていつて、誰彼となく挨拶をして廻つてゐた民子が、又此方へやつて來て、態とらしく眉を顰めながら、

「あゝ、私もうほんとに結婚式なんて凝り凝りだわ。頭痛がして耐らないのに、彼方此方へ引張り廻されるんですもの。ぐらぐらして眼が眩りさうだわ。」と、云つて、そこにあり合ふ椅子へ腰を下ろす。

と、中の一人は笑ひながら、

「あら、民子様、そんなにてれ隠しを仰有るもんぢやないわ。貴女がぐらぐらなさるのはあんまり幸福の峯が高過ぎるからなんでせう。ほゝゝゝ。」と、一端先輩氣取りで茶々を入れる。

と、民子は眞氣になつて、

「あら、隨分なことを仰有るわねえ。私、そんならいゝんですけれど、ほんとに今夜は何んだか悲しくつて耐らないんですわ。」と、云つて、そつと照子の顏を上眼でみながら、「ねえ、皆さん。今夜この中で一番幸福な方はこの照子様ですわ。ほんとに私、お羨ましくつて耐らな

いんですの。」と、戰を挑むやうな調子でいふ。

と、葉子と呼ばれた丸髷の若夫人は笑つて、

「あら、私分りましたわ。あの、今度ホテルへ私達をお招ぎ下さるのは照子様の番だつて、いふ意味なんで御座いませう。」と、さかしげに口を入れる。

民子は合點いて、

「無論、さうですわ。あの、それも今日お極りになつたんだつて云ふんですもの。」

「まあ、そりやお目出度いわねえ。私達も今度こそ照子様の順番だと思つて、待つてゐたんですの。それで何方へおいで遊ばすことに極りましたんですの。」

民子は口を歪めて、

「それが貴女、お相手の方が今夜この席へ被來つてゐるんですから面白いぢやありませんか。皆さんそれを御存じないのかと思ふと、私可笑しくつてねえ。ほゝゝゝ。」

と、今度は別の一人が好奇心に燃えた眼つきをしながら四邊を見廻して、

「あら、民子様、何の方なんですの。教へて下すつたつていゝぢや御座いませんか。」と、いふ。

民子は照子の當惑しきつた顏をさも面白さうにみながら、

「ねえ、照子様、あの、皆様にお教へ申してもよくつて？　ほゝゝゝゝ。」と　揶揄ふやうに云つて、「ねえ、秋子様、私内證で教へて差上げますわ。ほれ、彼方の衝立の前のところで、御老人の方と話して被居る方がありませう。タキシードを着て。あの方がさうなんですわ。」と、いふ。

民子が指さす方には、光雄が誰れとも知れない白髪の老紳士と並んで立つて、愉快さうに談笑してゐた。

それをみると、皆は思はず眼を欹だてゝ、

「あら、まあ、隨分シヤンな方ねえ。外務省か何處かへお勤めになつて被居る方？」と、一人が云ふと、民子は態と落着き拂つて、

「ほんとにねえ、あゝして被居るところをみると、外交官のやうですわねえ。ほゝゝゝゝ。皆さんあの方を御存知ないんですの。」

「ほんとに何誰でせう。私何處かでお見かけしたやうな氣もするんですけれど。……」

「ほゝゝゝゝ。あの方を御存知なけりや皆さん話せませんわねえ。」と、民子は得意げに鼻の先で笑つて、「ねえ、皆さん、あれが有名な柴山伯爵の一番うへの若様で、光雄様つて被仰る方なんですわ。法科大學で有名な方ですわ。」

「まあ、あの方が柴山様？あゝさう云へばいつか家庭畫報に出てゐらしつたんだわ。ほんとにシヤンなんねえ。」

「ところが貴女、この照子様は、あの方に思はれて、今度彼方からのお申込みで御結婚をなさることになりましたんですの。ですから私、照子様は幸福を一人占めになすつて被居るつて、さう申すんですわ。さうぢやなくつて？」

「まあ、お羨ましいわねえ。何にしてもお目出度いわ。照子様、お目出度う。」と、皆は口々に

云ふ。

照子はもう穴へも入り度いやうな恰好をして肩を縮めてゐた。

それからももう光雄と照子の話で少時の間持ち切つてゐたが、そのうちにいよいよ餘興の踊りや落語がはじまるといふので、皆は民子に誘はれて、餘興場の方へ入つていつた。照子もどうかして早く一人になり度いとは思つたが、まさか食堂があく前に脱け出す譯にもいかないので、すごすご皆のあとから隨いていつた。

餘興場では照子は態と一番端の椅子に腰を下ろしてゐたが、舞臺で何が演じられてゐるのかまるで知らない位に茫然としてゐた。四邊が靜かになつて、三味線の美しい音色や小皷の音が耳に聞えてくると、彼女の心はその音色にそゝられて、いつかしら松谷の方へ飛んでいつてしまふ。あゝどうかして一刻も早く、こんな僞りの宴席を脱け出して、戀しい松谷の側へ遁げていき度いと思ふと、彼女の眼には知らず識らずの間に涙さへさしぐまれてくるのであつた。

餘興が一時間ばかりで終ると、すぐに食堂が開いた。食堂の天井から流れてくる電燈の光は

何方かといふと薄暗い落着いた色を四邊に漂はせて、白布をかけた小卓が幾十となく並べられてゐるのが、却つて美しくみえる。盛花は花むしろのやうにみえ、その間できらきら輝く食器が得も云はれぬ贅澤さをみせてゐた。

照子は民子と特別な關係があるせゐか、主賓の卓へ席が設けてあつた。しかもそのすぐ隣りには光雄の席がとつてあつて照子が自席へつくと、間もなく光雄がにこにこ笑ひながらそこへ來て腰をかけた。照子はこゝでも氣詰りな思ひをしなければならないのかと思ふと、もう耐らなかつた。

光雄は料理の數が進んでゆくに從つて、白葡萄や、日本酒の盃を片端からあけていつた。そしてその合間合間に聲を潜めては、照子に話しかける。照子はその都度返事に困つて、碌にフォークもとれずにもぢもぢしてゐた。

デザートコースに入ると、來賓の連中は交々立つて祝賀の演說をやり出した。民子の父である博士は交際の廣い人なので、卓上演說をやる人々は社會の各方面の名士達であつた。商業會

議所會頭の中井男爵、宮內次官の宮村子爵、大學總長の田上博士、さう云つた人達は儀式的な莊重な言葉で、紋切形な祝辭を述べた。

光雄はもう聞き飽きたといふ風に、そつと照子の方を向いて、

「ねえ、照子さん、かういふ形式的な演說はもうぬきにして欲しいですねえ。もう僕なんか飽きあきしましたよ。」と、囁くやうにいふ。彼はもう少し醉つてゐるとみえ、眼を濕まして、此方へ顏を寄せる度に酒の匂ひが照子の頰のところへ生溫く流れて來た。

照子はそれを嗅ぐまいとするやうに、態と手帛で口を掩つてゐた。

光雄はそれでも構はずに、一層顏を寄せて、

「ねえ、照子さん、今夜は僕少貴女に話し度いことがありますから、歸りに早く此處を切上げて、一寸銀座のカツフエへ廻らうぢやありませんか。さうしていろいろお打合はせをすることはなるべく今夜のうちに僕の方から申し出して、貴女の了解を得て置き度いと思ふんですよ。」と、耳打ちをする。

照子は何を云はれてももう平氣なので、口はきかずに唯輕く合點いてみせた。そして、思はず新郎新婦の席の方をみると、民子は加藤醫學士と並んで立つたまゝ、上眼でじろじろ此方をみてゐる。その眼色には或冷笑に似た傍若無人さが現はれてゐた。照子はその時民子の荒んだ心が寧ろ恐ろしくさへ思はれたのであつた。

卓上演說がすむと、型のごとくシヤンパンがぬかれて、兩家の萬歲と、新郎新婦の未來を祝福する歡呼の聲があげられた。

やつとのことで食堂が閉ぢられると、照子は光雄と一緒に又前の接客室へ歸つて來たが、彼女はこゝを脫け出すのには今よりいゝ機會はないといふやうな氣がして、とても我慢がしてゐられなかつた。で、もう前後の見境ひもなく一寸光雄の方へ會釋して、廊下の方へ出ていかうとする。

と、光雄はそのあとに追ひ縋つて、

「照子さん、貴女、何處へいくんです。」と、いふ。

照子は態と微笑をみせて、

「あの、私、一寸手を洗ひにいつて參りますから。」と、いふ。

光雄は笑つて、

「あ、さうですか。トアレーを御存知ですか。」と、云つて、ともすると下へ隨いて來ようとする。

照子はもうそはそはして、

「いゝえ、私あの存じて居りますから、あのすぐに私歸つて參りますから、どうかそこで待つて被居つて下さいましな。」と、云つて、そのまゝそゝくさ廊下の方へ出ていつてしまふ。

光雄はそれでもついて來さうにしたが、そこへ民子が出て來たので、彼は到頭引止められてしまつた。

照子は一度は廊下へ出たものゝ、もしやひよつとして光雄があとをつけて來るやうでは却つて事を壞はすと思つて、やがてもう一度入口のところまで歸つて來て、そこからそつと內を覗

いてみた。と、その時、光雄は民子につかまつて、向ふの卓の方へ肩を並べて入つていかうとしてゐるので、照子もやつと安心してほつとしながら、今度は大急ぎで廊下の突當りの階段を下りていつた。

分り難い岩窟のやうな廊下を彼方へ曲つたり此方へ曲つたりして、照子はやつとのことで階下の廣い廊下へ下りて來た。彼女はひよつとかして、待たせて置いたお春に出逢はしでもしては一大事なので、もうまるで足も地につかないやうな心持ちで、玄關のクロークルームまで出て來た。そこにはボーイがゐて、もうお歸りで御座いますかといふやうな顏をしてゐた。

照子は先刻考へがあつて、番號札は態と自分で受取つて置いたので、それを示して自分のコートだけ取つて、

「あの、伴のものゝは今直ぐに取りに來ますから、あの、福井と申したらお渡し下さいな。」といふ。

ボーイは氣を利かして、

「はあ、畏りました。あの、それでは唯今お伴を呼びますから。」と、云つて、エントランスホールの方へ走り出て行く。

照子はそれを抑へて、

「あの、伴はよろしいんですの。私、電車で歸りますんですから。」と、いつて、そのまゝもう浮足になつて、正面の硝子戸を出てゆく。彼女はかういふ場所でさうした臆面のないことまで云へるほど氣が張りつめてゐるのであつた。

照子は冷たい夜風の吹いて通る戸外へ飛び出すと、もう涙の出る程嬉しくなつて、小走りにぱたぱた日比谷の方へ驅けぬけていつた。

四十五

照子は日比谷の停留場のところまで來ると、やつと氣も落着いて來たので、そこで手提げバツクを公園の石塀のうへゝ置いて、先づ何よりも先に身支度をした。コートの中へ手を入れて

模様の裾をぐいと引上げ、腰紐でしつかりとしめて、帶上げのゆるんだのなぞも手早く直した。そしてコートの前紐をもとの通りにとめると、すぐさま來合はせた本郷行きの電車に飛び乘つた。あんまり町へ出たことのない照子は本郷までいくのに、電車を利用するより外には何の智惠も持ち合はせてゐないのであつた。

電車は幸ひに空いてゐたので、照子は眞中の空いた座席へいつて腰を下ろした。ともすると、コートの裾から派手やかな裾模様が出るので、乘客は怪訝さうにぢろぢろ照子の顏ばかりみてゐるやうに思はれる。照子はそれが氣に懸つて耐らなかつた。

電車が神田橋から小川町へ出て、漸次と本郷の方へ近づいていくに從つて、照子の胸はもう痛いほどぎうつと込み上げて來た。もう彼女の胸には家出をするなぞといふ感じは少しもなくて、唯松谷に逢ひ度い一心で、眼の前には懷しい彼の面影より他には何もなかつた。

電車が明神坂を上つて、本郷一丁目の停留場へ來て停ると、照子はもうわれを忘れて大急ぎで下車した。そして一度來て見覺えのある本郷座の裏の横丁へ入つていつたが、松谷の宿をし

てゐる文房具屋はすぐに分つた。この前に來た時は晝間であつたので、いかにもその店へ入り難かつたが、今日は夜なので、いくらか彼女も氣が咎めなかつた。それでも彼女は一度はその店の前を通り過ぎたが、とみると、看板の裏になつてゐる欞子窓にはどうしたのか電燈の光が暗く消え落ちてゐる。

「ひよつとしたら、お留守なのか知ら、お留守ならお留守でお歸りになるまで待つてゐればいい。」と、彼女は息を彈ませながら心の中でいつて、やがて思ひ切つてそこの店の硝子戸を引開けて中へ入つていつた。

もう彼此九時過ぎてゐるので、店番をしてゐるものもなく、奥の間には薄暗い電燈ばかりがぼんやり障子に映つてゐて、家中しんとしてゐる。

照子は躍る胸を押へて、

「御免下さいまし。」と、云つてみた。

それでも中では誰れも返事をしない。

照子は何んだか眼の前が眞暗になるやうな氣がして、もう一度、

「御免下さいまし。」と、稍大きな聲で云つてみた。

と、その聲でやつと氣がついたのか、いつもの内儀さんが居眠りでもしてゐたやうな眼つきをしながら障子をあけて、さも吃驚したやうに、

「あら、お嬢樣、被來いまし。」と、いふ。その樣子がいかにも親しげなので、照子はもう恥かしいのも何も忘れて、

「どうも遲くお邪魔をいたしまして、申譯も御座いません。あの、松谷さんは被居いますでせうか。もしお宅でしたら、私一寸お眼にかゝり度いんで御座いますが、……」と、慄へを帶びた聲でいふ。

と、内儀さんはそれなりむくむく立つて來て、微笑みながら、

「松谷さんですか。ではお嬢樣はまだ御存知ぢやないんで御座いますか。」と、つかぬことをいふ。

照子はきよとりして、

「あの、私、何も存じませんが、松谷さんが何うか遊ばしたんで御座いますか？」と、息をつめて訊き返す。

と、内儀さんはそのまゝ雜記帳や、紙類を積んだ店先へ坐つて、

「あの、お嬢様、それでは貴女の方へは御通知もなさらないんですか。それはそれは、まあお氣の毒で御座いました。あの實はね、松谷さんは、春の展覽會へお出しになるものを描くとか仰有つて、四日ばかり前から越後の方へ被往つたんで御座いますよ。」

照子はさうと聞くと、まるで夢のやうな氣持ちがして、

「え、越後へ？　まあ。」と、いつたつきり、呆然としてしまつたのであつた。

内儀さんは氣の毒さうな顏で、

「ほんとにあの方も妙な方で御座いますのね。被往るなら被往るでお嬢様の方へも御通知をなすつて被往りやいゝのに、隨分變で御座いますのねえ。それも急にお思ひ立ちになつて、何んでも何處かでお友達にお逢ひになつて、越後の雪景色のお話をお聞きになつて被來ると、もうその晩すぐにお立ちになるつて仰有るんですもの。あの方の御性分は私もよく知つてゐますけれど、あんまり足許から鳥がたつやうなお話なんで、私もあつけに取られてしまひましたんですよ。ほゝゝゝゝ。」

照子もあの松谷のことであるからさうもあらうかと思つて、

「まあ、さうで御座いますか。」と、云つて、もう胸の中では激しい絶望を覺えながら、

「あの、それで被往つてゐる先はお分りになつちやゐませんでせうか。」と、訊く。さう云ひながら、彼女はもう胸が一杯になつて、熱い涙が喉のところまで込み上げてくるのであつた。

内儀さんは、合點いて、

「あの、それは分つて居りますの。丁度今朝彼方からお葉書を下さいましたんで、……」と、云つて、「あの、一寸どうかお待ち遊ばして下さいましな。お葉書をもつて參りますから。」と、云つて、彼女はそのまゝ奥へ入つていつて、やがて一葉の葉書を持つて來て、照子にみせた。

それは何處とも知れない大きな河の鐵橋の繪はがきで、それには忘れもしない繪のやうな角ばつた字で、

「今こゝへ來ました。まだ此地では四尺からの積雪で、今もさかんに吹雪が來てゐます。都合で新潟まで行つてみようかと思つてゐます。歸京はいつになるか分りません。先は右まで、松谷、越後直江津、鯖江屋旅館にて、」と、簡單に記してある。

照子はそれをみると、眼を睜つて、

「まあ、それぢや直江津に被居るんですか。」と云つて、「ねえ、お内儀さん、あの、失禮ですがこのお葉書を頂く譯にはいきませんで御座いませうか。」と、いふ。

内儀さんは微笑みながら合點いて、

「えゝ、お持ちなさいましとも。私共では別に要りませんのですから。」と、云つて、ふつと何か思ひついたやうに、「あの一寸お待ちなすつて下さいましな。あのお處だけ控へて置きませんと、又何か急な御用のあつた時に困りますから。」と、云つて、彼女はその葉書の鯖江屋といふ

旅館の名を幾度となく口の中で繰返してゐた。

照子はそれがすむと、やがてその葉書を貰つて内懷へしつかりと入れて、

「あの、それでは私、又彼地へお手紙でも差上げてみますわ。どうも夜遲くとんだ御邪魔を致しまして、御免遊ばせよ。あの、又松谷さんがお歸りになりましたら、伺ひますから。」と、いふ。

内儀さんはそれを見送つて、

「まあ、どうも折角被來つて下さいましたのに、お茶も上げませんで、それでは御免下さいまし。あのもう遲う御座いますから、どうかお歸り途をお氣をお注けなすつて。」と、いかにも親切に云つて呉れる。

照子はたつたそれだけの言葉ながら、何んだかあかの他人のやうな氣はしなくて、ふいと涙含ながら、

「有難う御座います。それでは失禮いたしますわ。」と、云つて、そのまゝ丁寧に挨拶をして、

戸外へ出てしまつた。

照子は戸外へ出ると、寒い風がひとしほ身にしみて、自分では幾ら押へようとしても云ひ甲斐もない涙がぽろぽろ頰に流れて來た。折角これほどまでに緊張しきつた心持ちで訪ねて來たのに、あの松谷が留守であるばかりか、而も東京を遠く離れて越後の空へいつてしまつてゐるとは、何んといふ悲しいことであらう。もしそれならそれで、一寸でも報らせて呉れたら、又何んとか仕様もあらうものを、さう思ふと、自分がこれほどまでに思ひつめてゐるのに、つれない冷たい男の心の中が照子には情なく思はれてならないのであつた。

併し照子は決して松谷を恨む心にはなれなかつた。もうかうなつては萬難を排しても、たとへ自分の生命を捨てゝも松谷に逢はなければならないといふ強い決心が照子の胸に燃えてくるのであつた。さう思つてみると、彼女は松谷が遠い旅に出てゐるのが、却つて自分の身には都合がいゝやうに思はれて、遠い直江津まで後を追つていかうといふ決心は直ぐさま彼女の心の中で極つてしまつたのであつた。

直江津と云へば、學校で地理の時に習つたばかりの土地で、東京からどれ程離れたところであるか、照子には想像にも及ばないのであつた。併しもう照子には道の遠いのを恐れるやうな臆病な心持ちは少しもなかつた。旅費さへ拂へば汽車は何處の國の果てまでもこの自分を運んでいつて呉れるのである。たとへ世界の果てまでも自分は今の心持ちなら、松谷のあとを追つていけると彼女は堅く信じてゐるのであつた。

照子はそんなことを考へながら歩いていくうちに、本郷の湯島の通りまで出て來てしまつた。何はともあれ、直江津へいく汽車ならば上野の驛から出るのであるから、大急ぎでそこへ驅けつけてみて、兎に角そつちの方面へ向ふ列車ならどれへでも乘つてみようと思つた。で、彼女は丁度來かゝつた俥を一臺雇つて、大急ぎで上野驛へ走らせた。

上野の停車場へ來てみると、正面の大時計は十時十七分前を示してゐた。すぐさま時間表のあるところへいつて調べてみると、幸ひにも午後の十時三十分に上野を發車する新潟行の列車があつた。

照子はもうさうと知ると、取るものも取敢へぬやうに切符賣場へいつて直江津までの切符を買つた。直江津までは二等だと七圓ばかりの賃金が要るので、照子は鞣革の紙入れから十圓紙幣を一枚ぬきだして、それで剩錢をとつた。彼女の紙入れにはあともう一枚の十圓紙幣とその他には僅か二三圓の金しか入つてゐなかつた。併しお孃樣で育つて來た照子には、唯の七圓といふ乘車賃の安さが胸にあるので、却つてあとのことは大して氣にもならないのであつた。

もう改札口は開いてゐるので、照子はその足で歩廊へ出ていつた。そしてなるべく空いてゐさうな二等車を選んで乘つたが、間もなく列車が夜更の空へながながと汽笛を殘していよいよ上野の驛舍を離れると、彼女はほつとしながらも、何んだか急に心細くなつて來た。何方を振顧つても知らない人ばかりなので、何にかしら旅の恐ろしさが初めて身にしみて來て、もう何うにも出來ないやうな氣がして來た。しかもその列車は夜もすがら見も知らぬ國から國を駛つて、明日の朝の八時過ぎでなければ直江津へは到着しないのかと思ふと、その心細さはひとしほだつた。

照子は座席のうへゝ身を縮めて、もう車窓から外も眺めようとはしずに、ごとごとと身を刻むやうな鐵輪のどよみに遣場のない悲しい思ひを乘せながら、唯ひたすらに神の加護を念じつづけてゐたのであつた。

四十六

列車が東信濃の高原へ上つて、荒寥とした千曲川の流域を漸次と北へ、北へと入つていく頃には、さすがに長い冬の夜もそろそろ明け放れて來た。東京を出る時にはあんなにいゝ天氣であつたのが、もう此處いらへ來ると、眞冬のさなかのやうな陰曇とした雪雲が四邊の山々に低迷してゐて、眼界はさながら濛氣にでも包まれたやうに朦朧としてゐた。刻々に明けてゆく東の方の空を眺めてゐると、ぽうッと明るんでゆく光の中に、村里の灯影や、白々とした河面などが次第次第に寂しくほのめいて來た。

照子はひと晩中、座席のうへゝ坐つたまゝまんぢりともしずに旅を續けて來たので、もうそ

の頃には、體の心までくたくたになるかと思はれるばかりに疲れ切つてゐた。同じ車室に乘り合はせた十七八人の旅客達は、男も女も皆空氣枕を取出して横になつたり、或は車窓の下枠に頭を凭せかけたりして、ぐつすりと寢込んでゐた。隅の方に陣取つてゐる商人體の男連れは、列車が輕井澤を出る時に酒を買つて、それをぐいぐい呷りながら何ごとかひそひそ話をしてゐたが、その聲も照子のゐる處までは聞えて來なかつた。彼女は東京を離れゝば離れる程、一人旅の心細さがつのつて、誰れ一人顏を見知つた人さへないだけに、何んだか顏を見られても空怖しくて、少しの間も氣が許せないのであつた。もしもよく新聞なぞで散見するやうに、自分に危害を加へるやうな男でもあつたらと思ふと、彼女は時々、身柱もとから冷たい水を打懸けられるやうな恐怖に襲はれるのであつた。

照子はさうした心持ちで、もう唯一筋に松谷のことばかり思ひ詰めてゐた。吹雪する北の國の貧しい宿で、もしあの松谷が自分に邂逅したら、何んといふであらう。如何に臆病な、眞面目な彼でも、きつと自分の決心を諒としても呉れるであらうし、又可哀さうとも思つて呉れる

であらう。それにしても自分は考へてみれば隨分思ひ切つたことをしたものである。いかに已み難い事情の爲めとは云ひながら、母を捨て、家を捨てゝ、遠い國へかうしてさすらつてゆくのである。たつた一人の松谷の爲めに、うら若い女の身でゐながらもう何ものをも擲つて、旅をして來たのである。昨日までは思ひもしなかつたやうな境遇の變化が怪しまれると一緒に、照子には又一方では生き甲斐があるやうな、自分で自分の心持ちを强ひて鞭撻してゐるやうな不思議の思念が頻りに湧いてくるのであつた。

照子の眼の前には昨夜の華やかな披露式の場面が今見るやうにくつきりと映つて來た。……今頃はあの加藤醫學士と民子は何うしてゐるであらう。式が濟むとすぐに函根へ新婚旅行をするとか云つてゐたが、今頃は湯本か塔の澤の宿で、果たして一生に二度と歸つて來ない甘い新婚の夢に浸つてゐるであらうか。照子には、併し、どう考へてみてもさうした美しい夢が二人の間に結ばれてゐようとは想像だにされなかつた。ホテルでの民子の態度から推しても、きつとあの純良の、眞率な加藤醫學士はそれこそ一生に一度の恐ろしい幻滅と、悔恨の苦さを味は

つてゐるに相違ない。それを思ふと、照子は民子に對して一層深い侮蔑の念を覺えずにはゐられなかつた。

照子は又柴山の光雄のことも思つてみた。もう手洗場から歸つて來るだらうと思つて、首を長くして待つてゐるうちに、自分の姿は既にホテルの門口から消えてしまつたのである。待ち草臥れて方々を探し廻つて歩いてゐる彼の姿を思ひ浮べてみると、照子の唇には或苦い微笑が浮んで來ずにはゐなかつた。

「ほんとにいゝ氣味だつたわ。」彼女は思はず口の中で呟いて、自分でもその時には心の儘の復讐をしてやつたといふやうな快さを覺えたのであつた。

さうしてゐるうちにも四邊は漸次と朝になつてゆく。沿道の村々の家並や、まだ深い殘雪の殘つてゐる田畑の境もくつきりとして來て、列車が低い切取線へ入ると、却つてそこいらが刻一刻に明るんでくるのが分る。灰色の雲はますます低く垂れ下つて、磊塊とした千曲川の廣い河原へ出ると、眼界は云ひやうもない程陰鬱な雪國らしい荒寥さをみせて來た。

照子も車窓から時々刻々に移り變つてゆく光景をみてゐるうちに、堪らなく胸が迫つて來て昨夜までは少しも思ひ出さなかつた母親のことが初めて心に歸つて來た。昨夜あのまゝ何の斷りもなく家出をしてしまつたのであるから、家ではさぞ皆して心配してゐることであらう。母親とても決して自分が憎いのではないから、昨夜なぞは殆んどまんじりともしなかつたに相違ない。たとへ自分の眞の生命を生きる爲めとは云へ、考へてみれば自分ほど不孝な子が又とあらうか。それを思ふと、照子も泣かずにはゐられないのであつた。彼女にはその時になつて、母親の言葉よりも亡き父の云ひ殘していつた訓言の方がより多く胸を責めて來るのであつた。

照子は、併し、もう今となつては何をしても駄目だと思ふより他はなかつた。母親に反抗して、自分ひとりの道を歩かうとあれ程決心をしたうへは、たとへ何事に出會はさうとも決して自分を枉げてはならない筈である。もう何事も思ひ捨てゝ、今更右顧左眄してはならないと、彼女は總てに對して強ひて眼を瞑らうとしたのであつた。

その列車は午前六時に長野驛へ着いた、それから又深い山地を越後路の方へ越えていつた。

田口へ來ると、照子は生れて初めてみるやうな深い雪が沿道の山や谷を埋めてゐるのをみた。もう分水嶺を越えてそろそろ下りにかゝると、俄かに激しい吹雪が襲ひかゝつて來て、四邊はたゞひと色の白い幕に掩はれてしまつたやうな佗しさを感じて來た。何處までいつても、その吹雪は益々募るばかりで、もうとても晴間を見せさうになかつた。列車に乘り込んで來た人達の話してゐるのを聞くと、こゝいらでもこの時候になつては珍らしい吹雪ださうで、此頃の雪は水分を多く含んでゐるから一年中でも一番危險が多いなぞと云つてゐた。照子はそんなことを聞くさへ胸が冷たくなるやうであつた。

それから間もなく、列車は漸うのことで直江津へ到着した。いつもなら八時半に着く筈なのに、約四十分ほど遲れて、やつと九時過ぎに着いたのであつた。

照子は雪に埋もれた直江津といふ驛名標をみると、もう胸は破れる程躍つて、いよいよ目的地へ着いたのかと思ふと、涙の出る程嬉しかつた。で、列車が停るのも待ち兼ねて彼女はすぐさま一尺ばかりも雪の積つたプラットフォームへ下りたが、何にしろ裾模様を着てそのうへ

からコートを着たばかりの風姿なので、何うにも身動きが出來ない。すつかり身扮へはしてゐるものゝ、ともすると派手な模様が裾からちらちらみえるので、驛員達も怪訝な顔をしてじろじろみてゆく。列車中では座席のうへゝ坐つて殆んど身動きもしずにゐたので、さして人目に立たなかつたが、下りてみると、照子自身もそれが氣になつてならないのであつた。

それでも照子は、もう松谷に逢ひ度さ一心になつてゐるので、吹雪の降りしきる中を平氣で歩いて、改札口から外へ出ていつた。そしてそこに居合はす橇曳を一人雇つて、鯖江屋といふのへ案内させた。低い箱のやうな車の中へ入つた時には、照子も涙の出る程心細かつた。

橇はやがて山のやうに根雪を盛り上げた見も知らぬ國の町を、異樣な恰好でのろのろ走つていつた。

四十七

鯖江屋といふ旅館は、停車場から約五丁も離れた、さして賑やかでもない町にあつた。橇曳

はそこの門口までひいてくると、

「どつこいさ。」と、梶棒をあげて、橇を軒下へ曳入れた。

橇から出てみると、それはいかにも北國らしい、雁木の出た、眞暗な宿屋で、まだ朝が早いせゐか、表戸も半分しか開けてなかつた。雪下ろしをした雪は堤のやうに軒先まで高く盛り上げられてゐて、荒い濱風はびゆうびゆうその外で吹き荒れてゐた。

照子は橇曳に賃錢を拂つて、やがて小障子になつた表戸を開けて、おづおづ中へ入つていつた。と、上框の向ふの帳場のところには年老つた親爺が一人丸く著膨れて頻りに帳合ひをしてゐる。表戸が開いたその音でそれと知つたか、ふつと此方をみて、

「おいでなさい。」と、いふ。

照子は案外にも大構へな、古風な宿屋なので、少し氣を呑まれて、もじもじしながら、

「あの、お邪魔をして濟みませんが、あの、此方に東京から來てゐるお客様で、松谷さんといふ方が被居いますでせうか。」と、丁寧に訊いてみた。

と、その親爺は眼鐘越しに此方をみつめながら、

「何んです？　松谷さん。」と、云つて、考へてゐたが、やがて、「あ、あの畫を描く若い人かね。あの人ならお氣の毒だが、昨夜こゝをお立ちになつてしまつたですよ。」と、いふ。

照子はそれを聞くと、もう落膽してしまつた。途々ひよつとしたら、立つたあとへ廻つて、逢へないやうになりはしまいかと、内々不安に思つて來ただけに、その失望は一層深かつた。彼女は少時の間は口もきけなかつたが、やがて自分でも氣をとりなほして、少し涙ぐんだ聲で、

「あの、それで何方へ參りましたんでせうか。もう東京の方へでも……」と、訊く。

と、親爺は小首を傾げて、

「さあ、何方へいかれましたか、私はよく知らねえですが、なあ、おい、お雪や。七號のお客様あ何んかお云ひ置きがあつたかいな？」と、いふ。

帳場の後は障子になつてゐて、その向ふでは誰れかごとごと拭き掃除でもしてゐるやうな様

子であつたが、その聲と一緒にその障子は開いて二十四五の色の白い女中が尻端折をしたまゝ顔を出して、照子の方を怪訝さうに見ながら、

「あの、松谷さんですか。あの方は何んでも泊へ被往るとか云つてゐなすつたですよ。昨夜立ちなさる時に、泊では何んといふ宿屋がいゝかつて訊ねなさつたで、まあ、金澤屋がよござんせうなんて申したことでしたよ。」と、兩方へ聞かせるやうにいふ。

親爺は合點いて、

「お、さうか。そんだらきつと泊へいかつしやつたに違ひねえわ。」と、いふ。

照子はもうさうなると、何うしていゝか分らなくなつて、涙も出ないやうな乾いた眼を落として、ぢいつと考へ込んでゐたが、やがて又顔をあげて、

「あの、一寸お伺ひ致しますが、その泊といふのは、此地から餘程遠いんで御座いませうか。」と悄れ返つて聞く。

親爺は長い煙管を取上げて、

「なにさ、泊迄なら譯はねえですよ。汽車で二時間と二十五分ばかりですから。」と、云つて、

「あの、貴女は何方からお越しです？」

照子はさう訊かれると、もう默つてゐられなくなつて、

「あの、私、東京から參りましたんですの。實は私、松谷の身内のもので、急にあの人に逢はなけりやならない用が出來ましたもんで御座いますから、昨夜の夜行で此方へ參りまして、唯今此地へ着きましたんですの。」と、いふ。

親爺も女中のお雪もさすがに氣の毒な顏になつて、まじまじ照子の顏ばかりみてゐたが、やがて親爺は、

「まあ、さうですか。そんなら貴女はあの方の御親戚の方ですか。」と、云つて、「併しそりやまあさぞお困りでせう。この雪に東京からぢや大變ですよ。それぢやいつそかうなすつたら何うでがすね。これから泊まで汽車でおいでなさるのもいゝが、まあ、それよりも一度電話で彼方の様子をお訊ねになつて御覽なすつたら、ようござんしよ。もし又彼方へ被往つてゐねえとと

んだ無駄足になりますからなあ。」と、親切に云つて呉れる。

照子は唯一途に人に縋り度いやうな氣になつてゐるので、

「まあ、ではその泊へは電話が通じるんで御座いますか。それなら何よりで御座いますわ。あの、お忙がしいところ、まことに願ひ兼ねますが、もし何んでしたら、どうか一寸おかけになつて見て下さいませんでせうか。」と、そゝくさしながらいふ。

親爺はぷかりぷかりと煙を吐きながら、

「なあ、お雪、先が金澤屋ならすぐに分るから、お前ひとつ呼んでみて呉れ。まだ朝が早いから、二時間もあつたら出るだらうから。」と云つて、今度は照子の方を向きながら、「それぢや今呼ばせますから、どうかまあ階上でお待ちなすつて下さい。今お火の支度もさせますから」と、いふ。

照子はもうかうなつては唯この家ばかりが頼りなので、兎に角此宿の客になつて、あと先のことを考へようと思つた。もう彼女にはそれ以外に何も方法はないのであつた。で、彼女はお

雪に案内されるがまゝに階上へ上つていつたが、お雪は階段を眞直に行きつくした暗い廊下の端にある十疊の座敷へ彼女を導いていつた。

「ねえ、貴女、此方が松谷さんの被居つたお座敷なんですよ。」と、いつて、お雪は座蒲團を床の間の正面へ敷いて呉れたが、照子はさうと聞くと、もうその部屋のじめじめしたやうな匂ひまでか懷かしくてならなかつた。

お雪は大火鉢を引摺つて來て、照子の前へ据ゑると、そのまゝ立つて、

「あの、それでは唯今すぐにお火を持つて參りますから。それよりもお電話の方を急がなけりやなりませんねえ。成るたけお早い方がよろしう御座いますから。」と、云ひ捨てゝ、彼女は大急ぎで階下へ降りていつた。

それと引違えに、階下からは十五六の小娘が、大きな十能に炭火をこてこて盛つて上つて來たが、その妙はそれをついでしまふと默つて階下へ下りていつてしまつた。

照子は凍えきつた兩手を火のうへにかざしながら四邊の樣子を見廻はしたが、この座敷にあ

の松谷が二日でも三日でも滯在してゐたのかと思ふと、何とも云へない懷かしい心持ちがしてならないのであつた。自分の敷いてゐるこの座蒲團も彼が敷いてゐたものではないかと思はれこの火鉢にもかうやつて彼が一日手をあぶつてゐたのではないかと思ふと、彼女は穢らしい火鉢の緣へ頰摺りし度いやうな心持ちにさへなつて來るのであつた。

緣端の外には雨戸がひいてあつて、それには一枚毎に硝子がはめ込んである。それから射し込んでくる明りは、座敷の中を薄暗く明るませて、唯さへ暗い心持ちが一層陰鬱になつてゆく照子はもう聲をたてゝ泣き度いやうな、行き詰めた氣がして、それから長いことぼんやり炭火ばかり見入りながら考へ込んでゐた。

彼此三十分も經つたかと思ふ頃、階下からはお雪がどたばた足音を立てながら上つて來た。照子は電話が通じたのだと思つて、もう胸ばかり躍らせながら待つてゐると、そこへお雪は慌たゞしく入つて來て、

「貴女、あの、とんだことが出來ましてねえ。」と、息を切らしてゐる。

照子は怪乎として、少し腰を浮かせながら、お雪はそのまゝ火鉢の側へ片膝ついて、

「まあ、何うかしましたんですの？」と、いつたが、

「いゝえ、ねえ、貴女、唯今局へ電話をかけましたら、あの、親不知の少し先のところで又大雪崩がありましたさうで、電報も電話もすつかり不通になつてしまつたんださうで御座いますよ。それにねえ、貴女ちつとも知りませんでしたら、昨夜の六時に直江津を出ていきました米原行の列車は、その雪崩へ乘り上げて、顚覆してしまつたんださうで御座いますよ。」

照子も二度吃驚して、

「まあ、そりや大變ですのねえ。一昨年も親不知では大變に澤山人が死んだとか聞いて居りましたが、……」

「いゝえ、それだけならよろしいんですけれど、あの松谷さんは丁度その六時の汽車でお立ちになりましたんですよ。昨夜は此處いらも大變な吹雪で、私も隨分お止め申したんですけれどいや、汽車さへ通じて居りや別に心配することはないから、と仰有つて無理にお立ちになつて

しまつたんですが、ほんとにとんでもないことで御座いましたねえ。驛にはもう昨夜のうちに分つてゐましたんださうですけれど、昨夜はまるで外へも出られないやうなひどい降りだつたもんですから、やつと町の人も今朝になつて知つたんださうですよ。ほんとにどう致しませう」と、彼女は顏色を眞蒼にして息を切らしてゐる。

照子はもう耳ががあんとして、お雪の言葉さへはつきりとは聞えなかつた。彼女はまるで雲の中へでも體が浮き上つていくやうな氣がして次第次第に氣が遠くなつていくのが自分でも分つてゐた。

戸外では轟々と海の風が吹きつけて、吹雪はますますかんに降りしきつてゆくのであつた。

四十八

照子はその思ひ懸けない報らせで、もう何うしていゝか分らなくなつてしまつた。何うして

神様はかうまで自分に辛くお當りになるのであらう。自分のこの切ない胸の中は、いくら神様でもきつと憐れんでゐて下さるに相違ない。それだのに、何うして神様は自分をあの松谷さんに逢はせては下さらないのであらう。ひよつとかしたら、神様は自分と松谷さんとを結びつけることを拒んで被居るのではなからうか。さう思ふと、照子はもう悲しさに胸の中が割れ返るやうな苦悶を覺えてきた。

いくら泣いても、喚いても、もうかうなつては何うにも仕様がないので、照子はその日は一日なすこともなく、その宿の二階で泣きながら時を消してしまつた。もう何んとか椿事のあつた現場から次の報らせが入つて來さうなものだと思つて、心待ちに待つてゐたが、併し午後になつても、何の消息も聞えて來なかつた。宿屋でも主人が心配して、幾度となく驛へも問ひ合はせて呉れたが、何分にも吹雪が激しい爲めに、鐵道の電話や電信さへも不通になつてゐて、その筋の人達にも一切様子が不明なのであつた。

午後の四時少し過ぎになつて、椿事の現場から鐵道の工夫の一人が歸つて來たといつて、や

つと先方の消息が少しづゝ分つて來た。顚覆したのはやつぱり昨夜の六時に直江津を發車した明石行の列車で、機關車が雪崩のうへゝ乘り上げたために、先頭から三輛目までの三等車が脫線顚覆して、二十六名ばかりの死傷者を生じたといふのであつた。そのあとの五輛は脫線しただけで、幸ひ乘客の數が少なかつたので、それに乘つてゐた旅客は大方無事で、此方へ引返さうとしてゐるものもあるし、又先方の泊から救援列車が來たので、それへ乘つて先々と旅をつゞけたものもあるといふことであつた。そして死者と、重傷者は先刻ラツセルを二臺つけて高田を發した救援車に乘せられ、遲くも今夜の七時までには直江津の驛を通過して、高田の病院へ送致される手筈になつてゐるといふことまでやつと分つたのであつた。

照子は親切な主人からその話を聞かせられると、もうとてもじつとしてゐられなかつた。でとにかく停車場へいつて、その列車のつくのを待つて、篤と調べてみるより他には方法もないので、彼女はもう必死の勇氣を揮ひ起して、停車場へいつてみることにした。主人もそれを聞くと僅か二三日でも家へお泊り下すつたお客樣ではあるし、それに他にももう一人軍人の方で

同じ列車でお立ちになつた方があるからと云つて、すつかり身支度をして一緒について來て呉れた。

停車場へ來てみると、もう吹雪も小止みになつたので、顚覆した列車に乘つた人々の安否を氣遣つて、町の人達は續々構内へつめかけて來てゐた。中には父親の生死を知り度さに、七歲位の女の子なぞも來てゐて、薄暗い電燈の點つた三等の待合室は、見るも無殘な光景を呈してゐた。

宿の主人は知人が多いので、彼方此方へいつて見も知らぬ人達と聲高な調子で話したり、驛長室へ入つていつたりしてゐたが、やがて改札口のところに佇んでゐる照子の側へやつて來て

「ねえ、お孃さん、何んでも死んだ人が五人、重傷者が十九人、それに傷の淺い連中が二十五六人もあるといふので、糸魚川からも醫者が出てゐるだけど、とても手におへねえださうですよ。それで救援列車はもう筒石まで來てゐるで、もう間もなく此方へつくちうですよ。怪我人の中で家の近えものは途中で下りたさうで、此方へ歸つて來るものは何んでも二十人位だとい

ふですがまあ、どうかお客様、その中へ入つてゐなければいゝがねえ。」

と、眉を顰めながらいふ。

照子はそんなことを聞くさへ、身内が慄へるやうな氣がした。

それからも彼此二時間も待つてゐたが、丁度八時少し過ぎになつて、北の方からは突如疲れ切つたやうな汽笛の音がながながと聞えて來た。驛員達もそれを聞きつけると、俄かに浮足になつて、深い雪を蹴つて信號所の方へ驅けていつたが、それと一緒に助役が來て、改札口を開放しながら、

「さあ、皆さん、どうか此方へ出てお待ちなすつて下さい。いよいよ列車が入りましたから。」

といふ。

照子も皆のあとからそゝくさ歩廊へ出ていつた。と、間もなく向ふの線路には蒼い燈がちろめいて、大きな怪物のやうなラツセルを先頭にした列車が轟々と地響きを打たせながら、ゆるい速力で驛へ入つて來た。人々は我を忘れて前へ出ていつた。

その救援列車はたつた三輛の二等車しか牽引してゐなかつた。それにも拘らず前後に二臺大型の機關車がついて、兩方に雪を被つたラツセルが配置してあつた。

列車が止ると、人々は爭つて車内へ入つていつた。照子も宿の主人のあとから車内へ入つていつたが、中には重傷を負つた旅客達が坐席のうへゝごちやごちやに寢そべつて、呻いてゐるものもあれば、死んだやうにぐつたりとなつてゐるものもあつた。大方は應急の手當が加へてあつたが、俄造りの繃帶からは鮮血が滲み出て、いづれも見るから肌に粟を生ずるやうな凄慘な姿をしてゐた。中には兩足を切斷された重傷者もゐて、蒼ざめた蠟のやうなその顏はとても正視するに忍びなかつた。

照子は一人一人みてはいつたが、氣が浮づつてゐるので、落着いて人顏を見分ける力さへなかつた。それでも彼女は宿の主人のあとからおづおづついていつたが、さうしてゐる中にも、知り人や親戚のものを發見して、大聲で名を呼んでゐるものなぞもあつて、その都度に照子はひやりと膽を冷したのであつた。

丁度最後の三輛目へ入ると、そこにはもう死んだものばかり乘せてあつて、菰がかけてあつたり、古毛布がかけてあつたりしたが、その隙間から蒼白い手足や死顔がちらちらみえてゐてまるで地獄のやうな血腥い光景であつた。照子はさすがに顔色も蒼ざめて、足の附根が强ばつたやうになつて、とても先へは進めなかつたが、その時、先へ入つていつた宿の主人は、ふつと此方を振顧つて、

「お嬢さん。此りやあの方ぢねえかね。」

と、顔中の筋肉を强ばらせながら叫ぶ。

照子ははツとして、半分失神したやうな氣持ちでそつちへ入つていつたが、そこには一人の青年が貧しげな脊廣を着て、片手を轢斷され、片手で自分のチョッキを握りしめながら死んでゐる慘死體があつた。とみると、亜髪は長く坐席のうへまで垂れ下つて血みどろになつたその頬にはたしかに見覺えがあるやうに思へた。

照子は思はず、

「あらッ」と、いつて、ふらふらつと倒れさうになるのを、やつと車窓の下枠へ手を突いて支へながら、ぢッとその顔をみたが、それは併し松谷ではなかつた。瘠せたところはよく似てゐたが、松谷よりももつと年をとつてゐて、もつと嚴丈な體つきをしてゐた。

照子は心の中で神の御名を叫びながら、

「貴方、これは違ひますわ。あゝ、私よかつた。松谷さんはもつと細い體をしてゐますわ。」と云つて、そのまゝ又先へ歩いていつた。

宿の主人もほッとしたやうな顔で、

「やあ、人違えでしたかね。そりや何よりです。」と、云つて、猶ほも兩方の死骸をみてゐたが併し到頭その中には松谷はゐなかつた。

宿の主人は一番端れの昇降段から歩廊へ下りて、

「ねえ、お嬢さん。まあ、いゝ鹽梅にこの中にやゐなさらなかつたが、それにしても何うしなすつたんでせうなあ。これぢやさつぱり樣子が分らねえから、私、向ふへいつて、車掌に聞い

て來ますだ。此處に待つてゐて下せえ。」と云ひ捨てゝ、彼は雪を蹴返しながら又列車の先頭の方へ歸つていつた。そこには驛の建物の中から射してくる光の中へ町の人達が眞黑に塊り合つて、がやがや騒いでゐた。中には殺氣だつてゐるものもあつて、大聲で罵つてゐる聲が物凄かつた。

宿の主人は却々歸つて來なかつた。とみると、吹雪はもういつの間にかすつかり止んで東の方の空には雲切れがしたのか、星影さへ二つ三つみえてゐる。上り線も下り線も今猶ほ開通してゐないので、大勢の人夫を乘せた無蓋車を牽引した救援列車は勇ましい汽笛を吹き鳴らしながら幾臺となく驛を出てゆく。その物音は驛の上屋へ響いて、さうした光景を初めてみる照子は、氣が遠くなるやうな心持がしたのであつた。

三十分ばかり經つと、宿の主人はやつと此方へ歸つて來て、

「なあ、お嬢さん。どうもさつぱり分らんですよ。この列車が此方へ入るまでに、途中の驛で十何人とか下りたさうだが、それは皆その近邊のもので、東京から來なすつたお客樣は一人もなかつたといふですよ。それに向ふでも十人ばかりのお客は傷も何んにもしてゐねえんで、雪崩のうへを越えて、市振へ出てそこから迎ひの列車へ乘つて、泊へいつたといふですが、松谷さんがその中へでも入つてゐられるんでしたら、此上もねえですがねえ。」と、思案に餘つたやうにいふ。

照子ももうかうなつては、唯天に任せるより仕方がないので、

「ほんとに困りましたわねえ。何うなすつてしまつたんでせう。まだその泊とかいふ處まではいつ汽車は通じないんでせうねえ。」と、泣きさうな聲でいふ。

主人はその顏を氣の毒さうにみて、

「いや、汽車が通じる處ぢやねえ。まだ電信も電話も何にも通じねえんださうですよ。併しまあ、幸ひ吹雪も止んだで、明日の午過ぎには跡形づけも濟んで、汽車が通ふやうになるだらうと驛長さんも云つてゐなさるですが、それも當てになる話ぢやないからねえ。」と、いふ。

附近に集つてゐる人達の話では、現場へは鐵道工夫はもとより、糸魚川邊からも青年會の連

中や在郷軍人團の連中が千人近くも集まつていつてゐるので、今夜中には何んとか道がつくだらうなぞと云つてゐた。

照子はさうしてゐても仕様がないので、やがて宿の主人に促されて、そろそろ歸り支度をした。もう着物の裾は散々になつてゐるので、そこから滲み上つてくる寒さは身内の血を凍らせてしまふかと思はれるばかりであつた。柵の彼方にみえる町の灯は氣味が惡いほど明るく輝いて、眞白な雪が方々の屋根を壓しつぶすやうに丸く盛り上つてゐた。

照子はそれから一時間ばかりの後に又やつと宿屋へ歸つて來たが、すつかり氣落ちがして、夕飯を食べる元氣さへなかつた。女中のお雪はそれを慰めて漸うのことで風呂をつかはせ、炭火をかんかん熾して、兎にも角にも飯にした。そして十一時を打つと松谷が敷いて寢た臥床らしい更紗形の夜具を出して來て、それを床の間の方へ敷いて、照子を寢かして呉れた。

その晩は吹雪は止んだが、恐ろしい海の風が夜もすがら雨戸を鳴らして、照子はとてもおちおち寢つかれなかつた、松谷の安否を思ふと。唯一途に悲しくなつて、長襦袢の袖を顏に押し

當てながら、彼女は聲を呑んで泣いてばかりゐた。

四十九

その翌日は、朝のうちはいゝ天氣になりさうであつたが、間もなく又海の方からは寂しい灰色の雲が流れて來て、吹雪は來なかつたが、それでも陰鬱な、重苦しい空合になつていつた。

照子はその朝も宿の主人に賴んで、驛の方へ訊いて貰つたが、松谷の消息はかいくれ知れなかつた。

丁度午前の十一時頃になると、階下からは宿の主人が上つて來て、照子の座敷へ入つて來ながら、

「ねえ、お嬢さん。今驛から通知がありましてねえ。この十二時の汽車から開通するさうですよ。やつと雪崩の個所を掘り開けたんで、時間はかゝるかも知れませんが、兎に角富山まではいくさうです。」と、自分の功績でゞもあるやうに微笑みながらいふ。

照子はもう途方に暮れて、火鉢の端でぼんやりしてゐたさなかだつたので、ひどく嬉しくなつて、

「まあ、さうで御座いますか。それは何よりで御座いますわねえ。」と、云つて、居坐ひを直しながら、「あの、でも、もう危いことはないでせうか。」と、訊く。

主人は腕を拱ぬいて、

「さあ、今日は豊中ですから、まさかのことはあるまいと思ひますが、まあ、兎に角かうして被居つても仕様がねえですから、無駄足踏むと思つて一應泊まで行つて御覧なすつたら、何うですね。もし彼地に松谷さんが被居らないやうでしたら、又此方へ歸つてみえりやいゝんですから。」と、いふ。

照子もすぐにその氣になつた。十二時といふともう間もないので、彼女は氣の毒さうに勘定をして呉れと頼んだが、主人は笑つて、

「なあに、たつた一晩お泊り下すつたゞけですし、御飯も碌に食らなかつたんですから、六圓

ばかりも頂いて置きませうか。」と、無雑作にいふ。

照子はそれだけ拂つてしまふと、もうあと幾らも殘らなかつたが、併しどうにも仕様がないので、恥かしさうに十圓の紙幣を一枚出して、主人の前へ置きながら、

「あの、これだけ差上げて置きますから、どうか、姐さんへも。」と、口籠りながらいふ。

主人は丁寧に辭儀をして、

「いや、こりや有難う御座います。それではもう時間がありませんから、すぐにお支度をなさいませ。」と、云つて、一寸十圓紙幣を額のところへ頂いて、そのまゝ階下へ下りてゆく。

照子はもう裾模様なぞは何んなに汚れても惜しくはないので、やがて立上つて、すつかり身支度をして、階下へ下りていつた。宿の主人は停車場まで送つていくといつて、聞かないので彼女は氣の毒とは思ひながらも、強つて斷る譯にもいかなくなつて、そのまゝにして置いた。

女中のお雪は上框のところへ送りに出て來たが、照子が一人で緊めた帶の恰好が悪いと云つて、もう一度コートを脱がせてすつかりしめ直して呉れながら、

「まあ、お嬢様、御旅行にこんなお風姿では御不便ですのにねえ。」なぞと云つて腰紐をぐいとしめて呉れた。

照子は明るい外の光の中で、自分の振袖姿をみると、さすがに氣恥かしくなつてしまつた。こんな風姿をして東京を出て來た自分のことも思はれると同時に、何も知らない人達がみたら、氣狂ひと思やしまいかと、それが何よりも辛かつた。

照子はやがて皆に丁寧に禮を云つて、遁げるやうに店先を出た。

停車場へ來てみると、開通してから第一の列車なので、旅客は相當に混んでゐた。宿の主人が切符を買つて來てやらうといふのを、照子は態と斷つて自分で買ひに行つた。もしや金が足りなかつたらと思ふと、もう照子は氣が氣ではないのであつた。

それでも幸に泊までは二圓と少しであつたので、照子はほッとして、それだけの金を窓口へ出した。そして二等の切符を受取ると、そのまゝもう改札口が開いてゐるので、歩廊の方へ出ていつた。

少時待つてゐると、やがて高田で編成したらしい明石行の列車が、ラッセルはつけずに、恐ろしいどよみを立てながら驛へ入つて來た。未だ沿道には雪の捌きがつかないとみえて、機關車はタンクのうへまで雪を被つてゐた。

照子は宿の主人に別れを告げて、二等車へ乘つたが、主人は帽子をとつて、

「それではあの、泊の宿屋は金澤屋ちうんですから、どうかお忘れにならねえやうにな。それでもし彼地に袴居らねえやうでしたらどうか又此方へ歸つておいでなすつて下せえ。」と、親切に云つて呉れる。

照子は涙ぐみながら、頭ばかり下げてゐた。

列車は五分の停車時間が過ぎると、威勢のいゝ汽笛を殘して、又動き出した。照子は車窓から顔だけみせて、宿の主人を見送つたあとで、今度は態と隅の方へいつて、小さくなつて坐席へ腰を下ろした。

三等車の方はひどく混んでゐたが、二等車の方はそれほどでもなかつた。十五六人の乘客の

中には鐵道の官吏らしいものが大部分を占めてゐて、彼等は一昨夜の椿事の現場へ視察にでもいくのか、雪崩の話で持ち切つてゐた。煙草の煙は濛々として、そのうへステイームの温氣が上血せるほど籠つてゐるので照子は氣持ちが惡くなりさうであつた。

列車は鄕津、谷濱、名立、と漸次に數ある驛々を過ぎていつたが、幸ひそこいらは除雪も比較的行屆いてゐて、時々十分か十五分づゝ停車する位のことで別に何の故障もなかつた。

糸魚川では大勢の人が乘り降りした。此處いらではまだ椿事の餘波が殘つてゐて、驛の構内には數多い人夫が簑を被て、大きなシヤベルをかついで、彼方此方にうろうろしてゐた。歩廊にはいろんな張り出しがしてあつたり、青年會の連中らしい若者が凛々しい姿で右往左往に行違つてゐたりした。

列車は間もなく又動き出して、いよいよ椿事のあつた現場の方へ近づいていつた。照子も床のうへに落散つてゐた古新聞でそつと車窓の硝子を拭いてみたが、とみると、列車はいつの間にか日本海の海岸へ出てゐて、すぐ眼の下には灰泥色をした怒濤が眞白な水沫を飛ばしてゐ

る。沖の方には雪催ひの雲が果てしもなく掩ひ被さつて、千波萬波は互に相追ひ相爭ひながら陸地をめがけて轟轟と打寄せてくる。線路の下には雪に掩はれた巨岩が怪物のやうに突出したり、蟠屈したりしてゐて、四邊には人家もなく漁船もなく、飛ぶ鳥の姿さへ跡をたつて、眞に荒寥の極みをつくしてゐた。此處こそ名だたる親不知子不知の入口なのであつた。

列車は探り足に一鎖へいつては止り、又一鎖行つては停りしてゐたが、やがてとあるスノーセツトを出ると今度はぴたりと停車してしまつた。車窓からみるとそこいらには鐵道工夫や、人夫達がうようよ立働いてゐて、俄か造りの低い棧橋のやうなものが線路の片側へつくりかけてある。そこで鐵道官吏の大部分は下車してしまつた。

照子は何うなつてゐるのか樣子がみたかつたが、そこからは丁度大きな岩で遮られてゐて、行手はまるで見えない。で、仕方がなしに座席へ坐つたまゝ、荒れ狂ふ日本海の怒濤ばかり見下ろしてゐた。

列車は約三十分ほど停車したあとで、又ぽうッと汽笛を吹き鳴らしながらごとりと動きだし

た。線路の片側には工夫達が列をつくつて、線路の方ばかりみてゐる。列車は人の歩くのよりも猶ほ緩いやうな氣味の悪い速力で漸次と曲角をまがつていつたが、と、やがて照子の眼の前には恐ろしい慘劇のあとがはつきりとみえて來た。

雪崩の雪はもう大方海中へ掻き落とされてゐたが、それでも海岸の岩のうへには二丈もあらうかと思はれる雪堤が横ざまに引懸つてゐた。その下には破壞したボーギー車がまるでマツチ箱でもひねり潰ぶしたやうに滅茶々々になつて、彼方此方に散亂してゐた。剝げた天井は蛇の拔殼でもみるやうに、白い腹をみせて、車臺の捻ぢ曲げられた殘骸は岩から岩へ棧橋をかけたやうになつてゐた。その間には多數の工夫が吹きつける潮風に簑をあほられながら一心になつて働いてゐた。

さうした慘澹たる光景は間もなく車窓から消えてしまつたが、併し照子の眼の底からはいつまでもその幻影が消えなかつた。恐ろしい吹雪の夜に、こんなところで遭難した松谷の心持は何んなであつたらう。たとへ負傷はしなくても、雪と、怒濤と、眞闇な夜の暗の中へ出た時の彼

の心持ちはほんとにどんなであつたらう。それにしても松谷は、と思ふと、もう照子は泣くにも泣かれなかつた。

列車は間もなく親不知の驛へついて、それから市振を過ぎるともう泊であつた。いつもなら二時間と少しで着くのに、もうそこいらへ來かゝつた頃にはそろそろ夕暮が催して來てゐた。

照子はもしや泊へいつて、松谷がゐなかつたら、何うしたものであらうとその時になつて思案しはじめた。後を向いて、そツと紙入の中の金を勘定してみると、もう僅か三圓足らずしかない。もし松谷がゐて呉れなかつたらもうその時こそ、彼女は進退谷まつてしまふのである。

併し照子の心は案外に落着いてゐた。落着いてゐたといふよりも、彼女はもう底の底から自暴自棄になつてゐたのであつた。どうせもうかう神樣から見放されてしまつては、死ぬより他に道はない。さうなるのが自分の運命だと思へば、實際惜しい生命ではなかつた。唯彼女は生命を賭してもいゝからたつた一眼でも松谷に逢ひ度かつた。

そんなことを思ひ續けながら照子は心で泣いてゐたが、そのうちに列車は漸うのことで泊の

驛へついた。彼女はすぐさま列車を下りて、改札口で切符を渡して、向ふへ出てみたが、泊は直江津ほど雪が深くはなくて、軒下には三尺位の根雪しか殘つてゐなかつた。

ふとみると、金澤屋といふ宿は停車場の廣場から通りへかゝる角から丁度二三軒目のところにあつた。大きな看板が出てゐるので、すぐに分つたが、照子はふつとみたときに、どうもその宿には松谷がゐさうもないやうに直感された。併し彼女は心の中で一心に神を念じながらそつちへ歩いていつて、とにかく一應訊ねてみようと思つて、そこの家の暗い入口へ入つていつた。そこも北國風の軒の深い、貧しげな家構へで、帳場のところでは女が二人爐の中へ足を踏み入れて、何かきやつきやと笑ひながら戯れ合つてゐた。

婢達は照子が入つていくのをみると悸乎として、此方を向きながら、眼をまじまじさせてゐた。

照子は恥も外聞も忘れて、

「あの、此方に松谷さんていふ男の方が泊つて被居りやしませんか。」と、訊いてみた。

と、女の一人は案外にも合點いて、

「はあ、泊つてゐなさるですよ。」と、いふ。

照子はそれを聞くと、頭腦がかッとして、躍り上り度いやうに狂喜しながら思はず、

「まあ、おいでなんですか。あの私は東京から參りました福井といふものですが、どうか一寸さう仰有つて下さいませんか。」と、息を彈ませながらいふ。

と、その女は揉み手をして、

「はあ、あの、ゐなさるにはゐなさるけど、今日は二時頃から、油畫を描くだつて、濱へいきなさいましたよ。もう、お歸りになるだらうと思つてますが。」と、いふ。

照子はどくどく躍る胸を手で押へながら、

「まあ、濱へですか。あの、濱は遠いんでせうか。」と、

女は笑つて、

「いゝえ、さう遠いちうでもねえですが。」

と、我慢しきれなくなつて訊く。

「何丁位あるでせう。」

「さあ、あれで五丁もあるかな。そこの踏切りを越して、松のある處を眞直にさいくと濱ですでなあ。」

照子はもうとてもぢツとしてゐられなかつた。で、そのまゝ濱まで行つてみようと思つて、

「あの、それでは私、一寸濱まで行つてみますから、もし松谷さんが歸つてみえましたら、あの東京から福井といふものが訪ねて來たと仰有つて下さいましな。」と、云つて、返事も聞かずに、ぷいと又外へ飛び出してしまつた。

教へられた通り、停車場の左の端れにある踏切りを越えて、松の叢立つたところから眞直にいくともう濱の砂丘はみえてゐた。雪も存外淺くて、一昨夜の吹雪も此邊ではさう强くも降らなかつたものとみえ、新雪はさほどに歩き憎くゝもなかつた。それでも深さにしたら二尺のうへも積つてゐるので、いつもの照子ならとても歩けやしなかつたが、しかしもう松谷に逢ひ度さで夢中になつてゐるので彼女は彼方へ滑り？此方へ轉びしながらも脇目もふらずに歩いてい

つた。

漁師達でも歩いていつたあとゝみえ、雪のうへには幾つもの足痕が眞直に續いてゐた。初めは吹く風が頰を刺すやうに感じられたが、終ひにはほつぽと汗ばんで來て、照子の胸では心臟が狂ほしいまでに動悸を打つてゐた。

やつとのことで照子は濱まで辿りついたが、そこから波打際まではまだ二丁もあつて、荒寥とした砂山と、小松の叢が波のやうな起伏をみせてゐる。照子は何處をみても松谷らしい人影はみえないので、狂氣のやうになつて、とある砂山の頂へ登つてみた。と、丁度そこから三丁ばかりの砂山の裾のところに、二三艘漁船が濱へ引揚げられてゐて、その附近には漁師らしい男が二十人ばかり烏のやうな恰好をして、默々と雪のうへで立働いてゐる。

照子はもしやそこいらにでもゐやしまいかと思つて、又息せきそつちへ歩いていつた。もう足の附根が痛んで、すつかり疲勞しきつてゐたが、彼女はそれでも歩き憎い雪と砂のうへをさつさと歩いていつた。彼女が歩いてゐるのではなくて、彼女の靈魂があるいてゐるのであつた

漁船の傍へ近寄つてみると、その船は今沖から歸つて來たとみえ、逞ましい漁師達は網を下ろしたり、獲物の大きな魚を整理したりしてゐる。それは四尺もあらうかと思はれるやうな鱈で、四邊の雪のうへには鮮血がまるで繪具をこぼしたやうに飛び散つてゐる。暗い灰色の空と白い波頭を、背景にしたその漁師達の姿は、何とも云へない陰鬱な畫になつてゐた。

とみると、その漁船の向ふのところに一人の男がカンバスを前にして、パレットを膝のうへへ置いたまゝ茫然として、漁師達の働く樣をみてゐる。それは云はずと知れた松谷であつた。

照子はそれをみると、息が塞がるやうな氣がして、生唾を呑みながら、

「松谷さん。」と呼んでみた。

と、松谷はその聲が耳に入らないのか猶ほも一心になつて、息もしずに漁師達の方ばかり凝視してゐる。

照子はそのまゝ彼の後へ歩み寄つて、その肩を突きながら、

「松谷さん。私ですわ。」と云つてみた。

その聲で松谷はぎくりとして初めて此方を振顧つたが、彼はその刹那幻影でもみたやうに、」唇の色まで變へて、

「おう、……」と、云つたきり、うつかり、パレットを落として立上る。

照子はその顏をみて、

「松谷さん。私、到頭來ましたわ。あなた、……私……」と、云つて、あとは涙に言葉を遮られてしまふ。

松谷もやつと人心地に返つたやうにつこりして、手先を細かく打慄はせながら、

「やあ、照子さん、僕は、僕は夢でもみてゐるのぢやないかと思つて。」と、云つたが、やがて

「いや、照子さん、それぢや何は兎もあれ僕もう宿屋へ歸りますから、歩きながら話しませう。」

と、云つて、漁師達がみてゐるので、手早く繪具や、畫架をしまつて、それを肩にかけながらそのまゝ歩き出す。

とある砂丘の陰へ入ると、松谷は耐らなくなつたやうに立止つて、

「照子さん。一體、貴女は何うして、こんな處へやつて來たのです。僕はまだ何うもほんたうのことゝは思へないですよ。」と、慄へを帶びた聲でいふ。

照子もその胸のところへぴたりと寄り添つて、

「それよりも貴方、貴方こそ何うして……」と、云ふ。

松谷は自分が先に東京を出てからのことを搔い撮んで話した。一昨夜の椿事の時には、丁度折好く最後から二輛目の車室に乘つてゐたので、彼は微傷だに負はずに、市振へ出る旅客の群に加はつてあすこから、救援列車に乘り、丁度午前二時に泊へ着いたのだといふ。

照子はその幸運を心の底から嬉んで、今度は、もう何から話していゝかといふやうな調子で自分のことを語り出した。幾度か涙に言葉を奪はれて、彼女はとても眞相を盡すことが出來なかつたが、松谷にはもう言外の意味まですつかり分るのであつた。

彼は苦笑を浮べながら、

「照子さん。それぢやいよいよ貴女と柴山さんの結婚は取極められたのですか。僕もさういふ

ことがあるだらうと思つて、實はたつた一人で旅へ出たのです。」と、悲しげにいふ。

照子はその胸に顏を埋めて、

「ねえ、松谷さん。もう私の決心は極つてゐるんで御座いますわ。私、自分の道を歩き度い爲めにかうやつて、母を捨て、家を捨て、世の中までも捨てゝ、死ぬやうな思ひをして、こんな處まで、貴方の、貴方の跡を追つて參りましたんですわ。ねえ、貴方、どうか私の心をお察し遊ばして下さいまし。私を生かすのも殺すのも、貴方のお心ひとつなんですから……」と云つて、彼女はせぐりあげて泣き出してしまつた。

四邊は漸次と暗くなつていつた。沖の方から吹いてくる風は颯々と小松の枝を掠めて、恐ろしい沖鳴の聲は物凄く聞えてくる。二人はさうしたまゝ東京を遠く遠く離れた北國の荒漠とした濱に茫然と夢心地で立つてゐたが、松谷はやがて俄に歔欷しながら、

「照子さん、僕は神樣に感謝します。僕はもう何んにも云ひません。僕は藝術よりも、何よりも貴女をもつともつと愛さなけりやならなかつたのです。照子さん、許して下さい。」と、云つ

て、彼は照子の肩を犇と抱き緊めながら、その頰に熱意を籠めた接吻を雨のやうに浴びせかけたのであつた。

照子はひた泣きに泣きながら、狂ほしいその愛撫の中に、神の國のやうな無限の幸福を見出してゐたのであつた。

その晩二人は貧しい旅宿の二階で、吹き荒れる風の音を聞きながら一生のうちに二度と味はふことの出來ないやうな樂しい心持で、ひと夜を語り明かしたのであつた。

五十

それから二人は二三日の間、泊の宿に滯在してゐて、その間に松谷は鱈船の畫の大體の構圖だけ定める、照子は東京の母親に長い長い電報を打つて諒解を求める、それで大方の手順もついたので、吹雪が晴れるとすぐに泊を發足して、今度は金澤から米原へ出て、東海道を廻つて丁度照子が家出をしてから十日目に再び東京へ歸つて來たのであつた。

東京へ歸つても照子は自邸へは歸らなかつた。そのまゝずつと松谷の宿へ寄寓してゐて松谷の師に當る澤渡畫伯を仲へ入れて、母親に對して正式に結婚の許諾を求めた。

福井家では柴山の方との關係はあるし、それに照子の仕方があまりに極端であるといふのでその間にはさまざまの波瀾曲折を生んだが、併しもう照子の決心が牢乎として拔けないので、又山田法學博士が改めて仲へ入つて、兎にも角にも同棲だけは許すといふことになつた。

その年の八月に照子の兄の貞一は佛蘭西から歸つて來た。彼は長い間酒と女の生活に耽湎してゐた男だけに妹に對しても同情が深くて、やつと母親を說き伏せ、松谷との結婚を內密で許して呉れた。その代り表面は母親の生きてゐるうちは福井家と義絕されることになつて、柏木の邸へは全然出入さへ差止められたのであつた兄の貞一は父の遺產の中から十萬圓だけを照子の名義に書き換へて呉れて、それで一生を安らかに送れといつて、彼女を勵まして呉れた。

その年の秋の二科會では、松谷の「鱈船」の畫がすばらしい成績を示して、有力な批評家達は筆を揃へて、彼を激賞した、松谷の將來は北國の濱で仕上げたその暗い畫に依つて、一層確實

に約束されたのであつた。その畫が佛蘭西のサロンへ送られると確定した日に、彼は本郷のさやかな教會で、照子と正式に結婚の式を擧げたのであつた。

柴山の光雄は照子を失つたことに依つて、その後世間的には面目を失つたが、併しそれが又彼をして酒と女との生活に親しませるいゝ口實にもなつた。

加藤醫學士に嫁いだ民子は一度は良人の赴任地である臺灣へ渡つたが、間もなく又內地へ遁げ歸つて來て、それから後は杳として消息が聞えなかつた。つひ此間、或人の噂に、彼女が光雄と二人で眞鶴行の汽車に乘つてゐたといふことを、聞いたが、それが眞實であるとすると、彼女は東京へ歸つて來てゐるのかも知れない。

松谷と照子は結婚すると間もなく、駿河臺の紅梅町に五間ばかりの家を借りて、その南向きの庭の一部に、松谷は自分で設計して畫室を建てた。その費用は總て照子の手から出たことは云ふまでもない。

毎日日が暮れる頃になると、松谷と照子はその畫室の窓を開けて、すぐ眼の先に聳えたつたニコライの尖塔を眺めた。秋が深くなつて、靄の多い夕暮れなぞには、その尖塔の影がさまざまの思念の中心になつた。照子は別な人生に眼覺めた今になつても、まだ昔みた幻の塔を見捨てることが出來なかつた。靄の海に浮ぶその尖塔の頂から、鐘の音が嫋々と聞えてくる晩なぞにはひどく興奮して。

「ねえ、貴方、今度はピアノを一臺買つて、この畫室へ据ゑて置いて私に讃美歌を歌はして下さいましな。私何だかこれだけぢや物足りないんですもの。」と、云つて甘えるやうに、松谷の肩へ頭をもたせかけた。

松谷は默つて笑ひながらその額に愛撫の接吻を投げるのであつた。

大正十二年十二月廿五日印刷
大正十二年十二月三十日發行
大正十四年八月五日十二版

幻の塔
定價貳圓

著作者　長田幹彦
發行者　和田利彦
東京市日本橋區通四ノ五
印刷者　佐藤磨
東京市神田松下町七番地

版權所有

發行所
東京市日本橋區通四丁目五
電話大手五一、四二一〇番
振替口座東京一六一七
春陽堂出版部

明治印刷株式會社
東京市神田區松下町七番地

文藝書類

長田幹彦著 ■金色夜叉 終篇（長篇小説） 金貳圓三十錢 送料十八錢

同著 ■祇園（小説集） 金壹圓七十錢 送料十八錢

同著 ■港の唄（長篇小説） 金壹圓五十錢 送料十八錢

同著 ■霧（長篇小説） 金貳圓 送料十八錢

同著 ■大地は震ふ（短篇集） 金壹圓五十錢 送料十八錢

夏目漱石著 ■合本 鶉籠、虞美人草（長短篇） 金貳圓七十錢 送料十八錢

同著 ■合本 三四郎、それから、門（長篇集） 金貳圓七十錢 送料十八錢

同著 ■合本 彼岸過迄、四篇（長短篇） 金貳圓七十錢 送料十八錢

同著 ■縮刷 虞美人草（長篇小説） 金貳圓二十錢 送料十八錢

Daishado
書肆大書堂
京都市中京區寺町通錦小路上ル
電(221)0685・振替京都3165

藏書印

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black